

# 優と千尋の神送り

ジュースのストロー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

千と千尋の神隠しの世界の千尋に転生してしまった優は、そこで何をして何を得るのか……

幼児の千尋が始めに立てた目標は

「川を泳いで上れる様になる」

ここから全てがズレて行き、原作が音を立てて崩れ出す。

※注意

原作にあやふやな点があるので、多少独自の解釈が入ります

●ご連絡

第1章（原作沿い）完結しました！

第2章はプロット考案中です……

# 目次

優と千尋の神送り

川で溺れる前に

琥珀川の神様と

引越しのその先に

神の世界へようこそ

交渉は慎重に

怒りと優しさと

部屋が1つ

愛とは

つづきは夢の中

お母さんとお父さん

おしごと

66 56 53 49 45 39 30 15 12 6 1

不穏な影

お腐れ様

焦る気持ち

ハクを捕まえて

おばあちゃん

契約

お別れ

少年よ大志を抱け

最後は幸せに

後書き

そして時は流れる

手紙

145 142 122 118 115 106 98 91 86 76 71

## 優と千尋の神送り

### 川で溺れる前に

ちよつと気が強くてクールだけど綺麗なお母さんと、親父臭いけど優しいお父さん。そんなありふれた家族に愛されて私は誕生した。初めて自分の名前を知った時に、もしかしてと思つてから、じわじわとその気持ちが強まって行くものの、未だ確信は得られない。

2度目となる幼少期を時の流れに身を任せて移ろうのも良いのかもしれないが、もしかしたらでも死ぬ危険があるのだ。だから取り敢えず

「お母さん私、スイミングスクールに通いたい。」

川で溺れない様に、何とか川を上れる位にはなつておきたいと私は思った。

私が頼み込んだスイミングスクールは、いつかは我が子に習い事をさせてみたいという気持ちがあった両親に全面的に支持され、近くの大形プール施設に通う事になった。週に3回程だが毎日通えばある程度の実力はつく事だと思う。

設けられた年齢制限のギリギリで教室の中でも最小を誇る私は、幼児向けのプールにて顔を水に浸ける事をしていた。始めはここから始まるのは分かる、分かるが当たり前に出来る事を褒められるのは恥ずかしい。少しだけ火照った顔を水から鼻先だけ出して冷やすと、プールの波に揺られながらボケーツと先生の話聞き流していた。

私の通う事になったスイミングスクールは、少しずつステップアップして泳ぎをマスターするらしい。そのクラスによって色が変わるスイミングキャップを被って練習をするのだが、私が被っている帽子は勿論最低クラスの赤色だ。順にオレンジ、黄色、黄緑、緑、青と色に変化していくらしく、青帽子にまでなるとクロールやバタフライ等のタイムアタックを行う。最低でも青帽子までは行かないと川を上るなんて夢のまた夢なのでこれから頑張って行こうと思う。

結論として、川上り出来た。これが達成出来るまでとは思って、スイミング以外に見向きもしなかったせいもあるだろうけど出来た。親や友人に化け物を見る様な目で見られたけど行けた。そんなにおかしい事だろうか。だつて鮭だつて卵を産むために川を上つて更に滝を登つて行くのだ。滝上りは出来ないが前日の雨で水嵩の増えた川を着衣泳する程度ならそこまで大した事ではないような気がするのだが。

丁度家の近くに流れていた「琥珀川」は幅が3 m程の川で小さいながらも、その分雨の後ほとんどでもない勢いで物を押し流す川である。地域活性の浄化作業の賜物か、透き通る様な水とヘドロとは無縁のサラサラした川底は夏になれば蛍が沢山現れて幻想的な風景が見れて、私も毎年楽しみにしている。

スイミングスクールで4歳にして青帽子を取得するという快挙を成し遂げた私は、この琥珀川に1人訪れて泳ぎをマスターした。友人宅に遊びに行く嘘をついてこつそり川で練習をするのは中々度胸が必要だったが、あの勘が鋭くて気の強いお母さんを前

にしてよくぞ私は隠し通せたとと思う。こういうお父さんには無い勘の良さは、私も持つのできつと遺伝なのだろう。

小さな体が流されない様に少しずつ慎重に体を川に慣らし、時には紐を括りつけて私は頑張った。冬の寒さにも負けず、時々流されている流木にも負けず頑張った。

そして、ある夏の暑い日に、子供達で川の近くで遊んでいた時の事。友達の一人が川で靴を流されてしまい、私は慌てて川に飛び込んだ。いつもより水嵩が多かったもののスイスイと靴が流されている所まで泳いで追いつき靴をゲットした私は、今度は逆流をして自分が飛び込みをした場所まで戻ってその子に靴を返したのである。その時に何故わざわざ陸を歩くのではなく川を伝って逆流したのかはよく分からないが、友人達にはとんでもなく驚かれた。靴を渡された子供は口を大きく開いていて間抜けな顔をしていたし、周りの子供達も大差はなかったと思う。河童が人間に化けているだのお前の母ちゃん魚などと言われた。失礼な、お母さんはちよつと目が離れているのを気にしているんだから本当の事を言っちゃ駄目じゃないか。えっ？ 私はお母似だつて？

……気のせいじゃないかな。



何はともあれ、これで次の段階に進む事が出来る。市の年齢制限なしの水泳大会で何度も優勝を果たしてきた私が突然スイミングスクールを辞めると言い出すと、周囲から何故辞めるのかと猛反対を食らったので渋々、最近まで1日も休み無しで入っていたスイミングスクールを週3回までに減らす程度に留めておいた。私も何だかんだ泳ぐ事が好きになってしまったので、息抜きには良いのかもしれない。

## 琥珀川の神様と

とある日に琥珀川のほとりをずうっと歩いてみると、木の影にひっそりと佇む様に小さなお社らしきものが建てられていた。今までで何度もお世話になった琥珀川だが、こんな所にお社が建っていたとは思わなかった。屋根に重ねられた木の葉を手で落とすて取り敢えずと手を合わせる。

こんな所に建てられていては誰もお祈りなどしないだろうと思っただが、お社を移動させるなんてそれこそ罰当たりだ。次の日に私は雑巾とバケツを持ってお社の掃除をした後にオヤツの残りのミカンを供えておいた。

何だかやる気が出てきてしまった私はその勢いでお社の補強に添え木を当てたり、ペンキで色を塗り直したり、寒くないように防熱剤を入れたりしていたが、これは罰当たりだったりするのだろうか。大丈夫？ だよね、きつと……。

いつも川を使わせて貰ってありがとうございます、これからもどうぞ宜しくお願いし

ますとお祈りを済ませて今日は近所のおばあちゃんから貰ったゴマ煎餅をお供えするとお社を後にする。

後ろから「こちらこそ、いつもありがとう」という声が聞こえた気がしたのはきつと気の所為だろう。

魔法使いになりたい、小学校入学を目前に控えた6歳の子供が言う分には両親は鼻の下を伸ばして全肯定する事であろう。もしかしたら11歳になったら某魔法学校からお手紙が届くかもしれないね、とでも言ってくれるかもしれない。

しかし私は10歳までに魔法使いになりたいのだ。いや、厳密に言えばそれに準ずる力が欲しいのである。しかしだ、かの琥珀川の神様でさえ湯婆婆という銭ゲババアに弟子入りして何とか手に入れられる力なのに、たかが人間の私がそんなものになれる筈が

ない。

どうしたら良いのか、悩みながらも毎朝塩を舐めてみたり、お手伝いを積極的にして徳を積んでみたり、座禅を組んでみたりしていたのだがイマイチよく分からないでいる。この際、仏に仕えるのも手かもしれないとまで思っていた私だったが、ある日突然気付いた。何か手がキラキラしている。いや、よく見たら全身キラキラしている。目の錯覚かと思っただけでキラキラは触る事が出来るし、本当に何なんだこれは……

「水に触れるとキラキラする？　のかな。」

淡い水色のキラキラが水に浸かった体の表面から浮き上がる。始めは水道で手を洗った時に気付いたのだが、水ならば何処でも良くて、お風呂でも川でもプールでも私の体からはキラキラが出た。少し汗をかいただけでも出るのだから驚きだ。

こんなびっくり人間になってしまって、どうしたらいいのかと戦々恐々としていたが、どうやら他の人にはキラキラは見えないらしい。お母さんやお父さんと一緒にお風呂に入った時は何を言われるのかと怖かったが、拍子抜けだった。それにしても、このキラキラは何だろう。

水の中に手を突っ込んでちよつと念を込めるとキラキラがよりキラキラ輝くし、効果としては水の抵抗を感じにくくなった？とか、潜水時間が1時間位なら余裕になったり、水中での視界がはつきりしたり……あれ、私ったら人間辞めてないか？

取り敢えずいつものお社でお祈りと共に報告をするも、勿論返事は来ない。図書館の古い本で調べてみてもそれらしきものは無かったし、綺麗で別に害もないし良いかと私は結論付けた。

どうやらこのキラキラは水が多い程に力を増すらしい。体に纏ったキラキラの量が全然違うので分かりやすい。そして体に纏ったキラキラを水に念じて送り込む事が出来た。するとその水を操る事が可能になったので、これには正直テンションがダダ上がりした。簡単な噴水だけでは飽き足らず、宙に浮いた水龍まで作った時は誰かに見せてくてたまらなくなつたが、何とか堪えた。これは流石に人間として拙い。

そんなこんなで随分とお世話になってる琥珀川だが、先日お母さんからとんでもない話を聞いた。近くに大型のマンションを建設する計画があるらしく、琥珀川を埋め立てる案があるらしい。

これはいけない！ どうにかしてこの計画を頓挫させないと!! と思つてはみたものの、私は現在ピカピカの1年生なのである。ちよつとキラキラして人間離れしてはいるものの、たかが子供の言う事など、誰も聞いてはくれない。これは責任者に少しづつ悪戯でもして、神の祟りとかにでもするべきかと思案していた矢先、私がキラキラで

操っていた水龍が突然話し掛けて来た。

「は？ ……へえっ?!」

随分と間抜けな声が出てしまい大きく口を開けていたが、水龍は琥珀川に宿る“ニギハヤミコハクヌシ”であると名乗った。あ、私は椎名優って言います……………つて、あれっ?! ハク様?! どうして?!

「今までの話は全て聞かせて貰った。そして言おう。私は優に悪事を働いて欲しくは無いし、これ以上こちら側に近付いて欲しくもない。このままでは川は土に埋れてしまうだろうけど、それも人の世の移り変わりには仕方のない事だ。だから、優には私の事は忘れて人間として生きて欲しい。」

「っそれはっ! そんなのは嫌ですっ!! 貴方が消えないで残る方法があるかもしれないのに、諦めて受け入れるなんて!!」

「…………優は優しいね。だけど、私は優にはそのまま置いて欲しいよ。」

水龍が目を細めたかと思うと、突然私の方に勢い良く突進して来た。あまりにも急だったので、とつさに腕で顔を庇う位の事しか出来なかつたけど、衝撃は全く無かつた。

水龍が私を通り過ぎる間、逆に体が暖かい様な心地良さに包まれて、声が聞こえなかつた。

「ごめん、本当にごめんね、優。ありがとう。さようなら。」

寂しそうな声と、私を慈しむ様な感情が感じられて思わず伸ばした手は何も掴む事は無かった。私はそんなに綺麗な人間じゃないのに……貴方が消えてしまったら……私は哀しいよ………

気が付けば私は木の影で眠っていた。

「あれ？ 何だかここに何かがあった気がするんだけど……」

寄りかかっていた木の周りを一周しても何も見つかるとは無かった。何かを忘れていた気がする。とても大切な何かを……。ポツカリと心に穴が空いた様な気持ちのまま、私はフラフラと家に帰った。

## 引越しのその先に

私が10歳になり、夏を迎えた頃。私は車に揺られて花束に埋れていた。お父さんの仕事の都合で遠くへ引越しが決まったためである。沢山の友人達は私が引越すのを嘆いてくれて、やれ「川で泳ぎ過ぎて海まで行くなよ」だの、「引越し先は水の中か？」等と言っていたやつもいたが、それもきつと寂しさの裏返しというやつだろう。胸一杯に花の匂いを吸い込んで、寂しさを紛らわせた。

「あれ？ 道を間違えたかな……おかしいなあ。」

「あそこじゃない？ ほらあの隅の青い家でしょ？」

どうやら車を運転しているお父さんが道を間違えてしまったらしい。

「道を一本間違えて来ちゃったみたいだな……このまま走らせても着くかな？」

「ちよつと辞めてよ。そうやっていつも道に迷うんだから。」

「大丈夫だよ。ちよつとだけ……ね？」

強引に話を進めてお父さんが車を走らせた。あまり外の景色を見ていなかったが、い



つの間にか深い森の中を走っている様だ。あまり整備されていないであろう道は、車体が揺れてとてもじゃないが何処かに捕まらずにはいられなかった。

「ねえ、この道本当に大丈夫？ 戻りましょうよ。」

「大丈夫だって！ 四輪駆動だからどんな道でも安心さ。」

どんどん狭くなって行く道に不安を覚える。この先行き止まりとかだつたらUターン出来るんだろうか。先程からビシビシと木の枝が車に引つ掛かっているので、開けた場所に行き止まりになってしまったら20分はバックで戻らないといけなくなる。お父さんのこういう樂觀主義というか無鉄砲さは私には全く理解出来なかった。

こうなつてしまったお父さんには何を言つても無駄かと窓の外を眺めると、小さな祠が立派な木の近くにズラツと並んでいた。何となく不安感が増してきたが、車のスピードは緩まらない。何故この道を進もうとするのか本気でお父さんが心配になった所で、急に車が止まって堪らず前に体が傾いてしまった。

どうやら道のど真ん中に大きな石像が立っており、ここからは車で進めないらしい。更にその向こうにトンネルがあると言つてお父さんとお母さんはさっさと車を降りてしまい、慌てて追い掛けた。

「何これ……怖い。」

真つ赤なトンネルの前で、立ち塞がる様に立っているダルマの様な石像は怪しく口の

端を上げてこちらを見つめている。トンネルから風がこちらに向かって吹いて、私の髪を遊んで行った。2人は何でもない様に通り過ぎてトンネルに入って行ったが、私にはそれが警告の様に見えるならなかった。

## 神の世界へようこそ

真つ暗なトンネルに、堪らずお母さんにしがみつくくと、呆れた顔をされてしまった。だつて仕方がないじゃないか、怖いんだもの。

トンネルを抜けると、そこは古い講堂があり、細い柱と何組かのベンチだけの殺風景な部屋で少しだけ拍子抜けした。上部の窓から降り注ぐ僅かな光に埃がまっつて、キラキラしている。

お父さんが奥にまたトンネルを見つけたとはしやいだ声を出して、お母さんが返事をする、引き返そうと懇願する私を無視して奥へ奥へと進んで行つた。私は今更一人で車に戻るのも嫌だつたので、仕方なく付いていく事しか出来なかつた。

トンネルを抜けるとそこは、一面の青空と緑の草原だつた。はて今日はこんな快晴だつたかと頭を傾げるも、気持ちしが沈んでいたためそう勘違いしていただけかもしれない。何はともあれ、風が気持ち良く、清々しさを感じた。

後ろを振り返ると、暗いトンネルがあつてやはり不気味だが、私達がいた建物は大きな時計塔だつたみたいだ。漢字に似た文字が書かれたカラフルな文字盤の付いた時計が赤いレンガの上部に設置されていた。日本でこんな建物を見られるとは思つてもみなかったので少しだけ感動して眺めていると、両親に呼ばれてそちらを向いた。

お父さん曰く、バブルの頃のテーマパークの残骸の様なものがあるらしく、子供をそつちのけで探検に行くらしいので慌てて、私も付いて行つた。途中にあつたチヨロチヨロしかかない水の流れを飛び越えて渡ると目に入った大通りは塵一つなく、跡地にしては随分と小綺麗に整備されているなどぼんやり思つた。

まるで商店街の様な店達はパステルカラーのカラフルな店が1列に並んでおり、まるで海外に来たみたいだつた。看板の文字も読めはするが、何を売る店なのかは全く分かんず、ついつい目移りしているといつの間にか両親とはぐれたのに気付いた。

「……にしても気味が悪いな。これだけ整備がされていて誰もいないなんて。」

軽く鳥肌の立つた腕を擦りながらも通りを歩く。まだ日が暮れるまでも時間があるし、少し位なら離れていても大丈夫だろう。

この商店街は中心に大きな通りがあり、私はずっとそれを辿つてきたのだが、この先に何があるのか気になったのだ。物珍しさに目を動かしながら足を進めると、この先は石の階段になっており、その上に赤い灯籠と立派な松が立っていた。

「千尋ー！ こっち来なさい!! 良いものあるわよ!」

急にお母さんの声が聞こえて吃驚した。どうやら近くのお店の中を物色しているみたいで、今行くと返事を返して道を引き返す。どうやら1人の探検はここまでみたいだ。

声を辿って2人を見つけると、その目の前には何故か湯気を立てた料理の数々が並んでいた。両親はそれを並んで食べるらしい。やつぱり跡地ではなかったのか……つてえつ、店員さんいないのにそれ勝手に食べて大丈夫なの?! さっきまで誰もいなかったのに急に料理が出て来るって怪しくない?? 私がおかしいの???

疑問は尽きなかったが、2人は私が止める暇もなくすぐに食べ始めてしまい、手遅れだった。店員さんに後でお金払えば良いって、そういう問題じゃないでしょ! これ絶対おかしいって!!

2人の服の袖を力一杯ぐいぐい引っ張るも体格の差でかビクともしないし、美味しい美味しい言って凄い勢いで料理を食べる大人達に呆れてしまった私は2人から目を逸らして、先程の探検の続きでもしよるかと外に出た。

「あれ?……もう日が傾いている……………」

店を出ると外が暗くなり始めていた。そんなに時間が経っていたとは、気付かなかつた。良く見ると、少しずつ商店街を飾っていた提灯の明かりが灯り始めている。ここは

夜の間しか営業しない商店街だったのか、それなら納得だ。

「ん？……何だ、あれ……」

視界に写ったのは黒い影の様な人形のもの。それが揺らり揺らりと揺れて歩いていた。よく見渡せば、似たようなものがそこらかしこに歩いている。私はそれに気付くと急いで両親を呼びに戻った。

「お母さん！ お父さん!! 大変だよっ!!」

お店に入つてすぐに大声で呼び掛けるも返事はない。それも当たり前だ………何で、豚が目の前にいるんだ……

両親の服をはち切れんばかりに着こなした豚が2頭、両親が座っていた席で並んで料理を食っている。これはまさか……両親なのか……？

何度も呼びかけても料理に集中していて全くこちらを向いてくれないし、店内にいた黒い影の店員らしきものに叩かれて椅子から転げ落ちて尚、料理を一心不乱に食う姿は家畜以外の何者でもなかった。

「何………これ………」

私は思わずその場を駆け出した。すれ違う黒い影に怯えてそれがいない場所を探して、走り抜けた。

息も絶え絶えになりながら、何とか車まで戻ろうと時計塔を目指していたら、ふと足

元に水の感触が。暗くて良く分からなかったが、途中にあったチヨロチヨロだった水が大きな湖の様に広がって、行く手を阻んでいた。

ここで、一般人なら引き返すのかもしれないが私は深い湖程度なら余裕で泳ぎ切る事が出来る。視界は悪いが波も流れもないのだから、海よりよっぽど安心だ。

それじゃあと入水をしかけた時に、屋形船が近くに乗り上げたのに気付いた。近くに来るまで全く気付かなかった。それに乗船していた真つ赤な平安の貴族服を纏い白い面を被った中身が空洞の者達が続々と降りて来る。それらは私に気付いてもスルーして商店街の方へ向かって行く。それを身構えながら思わず眺めていたが、嫌な事に気付いてしまった。

もしかしたら、この湖は何処かこの世じゃない世界と繋がっているのかもしれない。そう考えると、泳いでどうこうなる問題じゃない。最悪、貞子の様に足を掴まれて溺れさせられる可能性もある。そんな命を賭けた一か八かの賭けをする訳にもいかず、じゃあどうすれば良いのかと私は半ば呆然としていた。

両親は豚になるし、帰れないし、黒い影は怖いしで今日は散々だ。もうそこら辺で眠って、起きたらお布団の中だったりしないだろうか………しないよなあ。引越す前に戻りたい……と現実逃避気味に考えていた時、ふと手が薄くなっているのに気付いた。いや、手だけじゃない。体全体が薄く透明になって来ている。

「やだ、手がっ!! えっ、何で?!」

必死に心の中で戻れ戻れと念じてみるも、薄さは元に戻らない。このままじゃ私もあの黒い影と同じになってしまうのではないかと恐怖に手が震えるも、どうする事も出来ない。

「何か、何か手は……………っそうだ水!!」

恐る恐る湖の水に手を伸ばす。色は透明で透き通っているし、恐らく問題はないだろう。片手を試しに突っ込んでみると、いつものキラキラが手に纏い始めた。水から引き上げて手を確認すると、キラキラしていて良くは分からなかったが元のしつかりした体に戻っていた。

「はぁーっつ、取り敢えず少しずつ全身を濡らそう。」

思わず安堵のために出てしまった大きな溜息と共に作業を進める。濡らし残しがあつて、その部分だけ欠如してしまつたらとんだバイオレンスなので漏らしが無いように確実にしつかりと。最終的に全身ずぶ濡れになってしまつたのは仕方がないとは言え、夜にはちよつと堪えた。

「寒っ、取り敢えず明日の朝まで隠れてたら何とかならないかなあ……。」

夜風にどんだん体温を奪われて震える体を抱きしめて熱が逃げるのを防ぐ。黒い影は日が落ちてから現れたのだから朝になってしまえば消えるのではないだろうか。



……その場合、私の両親も帰って来ない可能性が大なのだが。

ともあれここは船着場みたいなので目立ってしまふ。先程の影は私をスルーしていたが、今度もそうとは限らないので何処かに一旦移動する必要があるだろう。

「お母さん、お父さん……………」

せめて豚になつてなかつたら助けに行けるのに……。あの姿じゃ引つ張つて連れて帰る事も出来ない。

それにしても豚か。何かの呪いにしてもどうしてわざわざ豚にしたのだろう……。まさか食べるつもりなのだろうか。うわあ嫌な想像をしてみました……。

「つふうー……、駄目だ今は集中しないと。」

薄情かもしれないけど、切り替えは大事。私まで豚にされてしまったら助けに行く人が誰もいなくなってしまう。

このまま隠れて朝を迎えたとして、両親を連れて帰れないのでは駄目だから私は単身で敵地に乗り込まなければならぬだろう。一先ず両親の事は保留にして、誰かしらあちら側の存在と繋ぎを作らなければいけない。そうしないと豚の呪いが解けないから。それにはまず、適した存在を見つけなければいけない。適当に選んでは駄目だ。下手をすれば私が簡単に食われてしまふ。

「見つかるかなー……………取り敢えず黒い影は私の事を無視するから却下だね。」

大通りを駆けて行く時は大ききや付属品の違いはあれ、黒い影以外は存在しなかった。それ以外に見かけたのは先程の屋形船の平安貴族達だが生憎もう既に何処かに行ってしまったし、湖に他に船らしきものは見えない。形が人に近いのは高得点だったのに惜しい事をしてしまった。

それ以外のあちら側の存在はまだ見ていないが、もしかしたらいるであろう場所は分かる。大通りのずっと先、石の階段を上った先の灯籠と松の木の所だ。松の木のせいでその先が全く見えなかったが、あそこに何かがあるに間違いない。そしてそこにはきつとあちら側の存在がうじゃうじゃいるのだろう。

時には店の看板に、時には店と店の隙間に体を振じ込んで隠れながら大通りを沿って進む。私が走り抜けた時よりも随分と賑わいを見せている商店街は、それに比例して私のS A N値をゴリゴリと削って行った。

所々に黒い影以外の存在も見受けられる様にもなつて来たが、あまり良さそうな者とは出会えていない。鋭いナイフを持ったなまはげの集団だったり、タコ型のU M Aだったり、巨大ヒヨコだったり……人形が全くいないだと。本当にあの時の私は惜しい事をしてしまった。……過去の私を殴り飛ばしたい。

「あ、(う)さつききの店だ……。」

タイムリングを見計らってチラツと覗いた店内は黒い影しか動いておらず、散らかった店内や豚の姿は見る影もなかった。どうやらもう何処かに連れていかれてしまったらしい。……あの黒い影が食べているのが両親の肉じゃなければの話だけど。

石の階段付近は、流石に障害物となる看板等が設置されておらず、さてここからどうしようかと頭を悩ませていると後方から巨大ヒヨコの集団がやって来た。彼らは非常に可愛らしい顔で頭に葉を載せているのだが、その頭もトリ頭みたいだった。その巨体故にか、よく看板に体をぶつける個体を見かけるので、何処か抜けているのかもしれない。これはチャンスとその隙間にそっと自分の影をしのばせて巨大なモフモフを体感していると、何とか階段を上り切る事が出来た。

「うわあっ……。」

思わず漏れた声は目の前の光景によるものだった。

灯籠と松の木を潜るとその向こう側には巨大な城の様な建物が建っていた。中の照明が綺麗で、良く見ると油と書かれた看板やモクモクと煙が出るこれまた巨大な煙突があり、私にはこの建物が何であるのか正直分からなかった。

そしてその全面に架かる真つ赤な橋には予想通りにあちら側が存在が見受けられて、未だ巨大ヒヨコの影に隠れた私には気付いてなさげだがそれも時間の問題だろう。

「これだけ明るいと、影に隠れるのも難しいな……。」

さて、どうしたものか。取り敢えず橋の近くまで何とか来た私はさつと橋の柵に手を駆けて、そこから飛び降りた。

ヒョイツと柵の一部に手を引つ掛けると橋にブローンとぶら下がる。後は手の力だけで体を支えながら横に移動を開始した。

ふと物音に気付いて腕を伸ばして下を覗けば、何故か走っている電車。照らされたライトが湖の水を押し退けてぐんぐん走って行く姿が分かった。明らかにこちら側の電車ではなかったたので、ふとあの電車が何処に向かうのか考えて止めた。絶対に緑な場所ではないだろう。

「んっ？ 何か人間の匂いがあるぞ?！」

電車を眺めていてぼおつとしていたせいか、ふと聞こえて来た声に胸が跳ねた。独特の掠れた高い声は橋の上から聞こえていて、私を探し回っているみたいだ。

そつと、懸垂の要領で橋の床から鼻より上だけを出して何うと服を着た大きめの力エールがあちこちを跳ねて探し回っていた。

「何だか凄い三下感があるカエルだな……媚び売つてそう、あ、やっぱり。」

探し回りながらもお客様?らしき者達にも気を配る姿は従業員の鏡かもしれないが下心が透けて見えている。実際に手を揉んでいるし、ニヤけた笑顔が気持ち悪い。

ふと、カエルがこちらを向こうとしたので慌てて頭を下げる。ピョンピョンと跳ねてこちらに近付いた来たカエルに見つからないか冷や汗をかきながら、ふと「っ」思いついた。

「匂う、匂うぞ。こっちの方から人間の匂いがする！」

鼻をひくつかせて誘われる様にこちらへやって来るカエルが橋の端っこまで来た所で、私は勢い良く手を伸ばしてカエルの頭をワシ掴みにした。カエルの潰れる様な、いや様なじゃないか、呻き声と共にジタバタと暴れようとするのでひっくり返してそつと手を離れた。こうすると、カエルは仮死状態になって暫くの間動かなくなるのだ。

暫くしてハツと目を覚ましたカエルが何かを呻く前に口を強制的に閉ざさせる。本能的に敵わないと察したのか、カエルはそれ以上抵抗をせずに大人しくなった。

「まず最初に言っておくね。もし君がおかしな行動をしたら、その時点で潰す。賢い君だったら、どうすれば良いのか分かるよね？」

コクコクと振り子の様に頷くカエルを見て、私はやっとカエルの口から手を離して、胴体を拘束するのに留めた。

「良い子だね。じゃあ次。人間が豚になってしまった呪いを解く方法は分かる？」

「……。」

「……私は分かるかって聞いてるんだよ。早く答えようよ。」

「そつ、それは恐らく湯婆婆様の魔法によるものかと……。」

「湯婆婆様の魔法？　つまり簡単には解けないって事？」

「っはい。解けるとしたら湯婆婆様か、……もしかしたらハク様しかいないかと思いません。」

「その2人はどういう者なの？　どの程度偉い?？」

「湯婆婆様はこの油湯の経営主です。誰も逆らう事など出来ない。ハク様は湯婆婆様のお弟子様です。湯婆婆様程ではありませんが、魔法の腕は確かです。」

「ふうーん、そつかー……。」

この2人の内のどちらかと接触しなければいけないのだが、どうすれば良いのだろうか。どちらも一筋縄ではいかなそうだし、いざ対面してもじゃあ呪いを解いてあげるとはならないだろう。円満に交渉するにはこちらも相手に何かしらの手札を見せなければならぬ。

案1、このカエルを人質？にして交渉する……却下。人質としての価値があるのか判断がつかない。

案2、背後から奇襲をかけて命を握り命令……却下。魔法を知らない私には、それが呪いを解くためのものなのかこちらを攻撃するためのもののかも分からない。

案3、カエルを操って呪いを解いてもらう……いや、無理だな。カエルが裏切る可能

性大だし、そもそも豚にした人間の呪いを解いて欲しいなんて理由が何であれ怪し過ぎるにも程がある。

案4、私自身の価値を示す……豚としての資産価値にしてしまうよりも更に上の価値を示せば取り敢えずの身の安全は保証されるかもしれない。ここで働きたいと訴えるとか?……10歳の娘が何を言ってるんだと笑われるのがオチか。じゃあ……

「ねえ君、ちよつと見ててね。」

そう言つて私は念を込める。すると、未だに乾いていなかった、服に付いている水分が玉の様に空中に浮かび上がる。それらはクルクルと回転して形を保ち、私の目の前に整列した。

「どう思う? こゝこれはつ、魔法!? 何でむぐう!!」

「声が大きいよ。しいゝ。」

再びコクコクと頷いて落ち着きを見せたカエルを見て、口を閉ざさせていた手を離す。続きを促してやればカエルは恐る恐る話しを始めた。

「俺ではよくは分かりませんが、これは高度な魔法ですよね? 何せ魔法使いは滅多にいないので驚いてしまいました。すみません。」

「ここでは湯婆婆様とハク様っていう2人しかいないって事?」

「その通りです。魔法自体も滅多に見られるものではないですし……。」

成程、それなら良かった。少なくとも私には、豚にしないだけの価値はありそうだ。それならば話は早い。一先ずこのカエルを使つて湯婆婆様とやらに直接話をつけに行こう。

「よし、じゃあ決まり。湯婆婆様に直接会いたいから案内宜しくね。」

「は?! いや、無理ですつ「宜しくね?」……はい。」

片手で掴んでいたカエルを太股に挟んだ時に、湿った感じが気持ち悪かったが、潰れない様に気を付けながら両手を使つて橋の反対側まで向かうと、カエルを掴み直してヒヨイと柵を乗り越えた。

柵を乗り越えた所は誰にも見られていなかったが、すぐにのっぺりとしたおかめ顔の従業員が私に気付き、声を上げると周りを他の従業員に囲まれてしまった。

「おいお主、人間じゃないか。何故こんな所にいる?」

集団の中から貴族服のやっぱりのっぺりとした顔つきの男が代表で出て声を掛けて来た。顔は明らかにこちらを怪しんでいて、何処か蔑んでいる様にも見える。

何とかしろと手にしていたカエルを離してせつつくと、カエルは多少ぎこちない動きで跳ねた後、ため息を吐いて貴族の男に向き合った。

「貴様無礼だぞ。こちらは湯婆婆様のお客様であられる。」

「は? こんな人間の小娘が、湯婆婆様のお客人だと? 何を問の抜けた事を言ってい



る。」

「では、ただの小娘じゃない所をお見せしましょう。」

「は……何を……」

念を込めて、先程出した水の玉よりも大きな玉を一つ作り出す。今度は工夫をして、目の前の貴族の男の形にしてみたら、当の本人は口を開けたまま固まってしまった。

「ちよつと君、叩いて来て。」

「え？ あ、はい……」

カエルが高く飛び跳ねて、頬を思いつきり叩かれた貴族の男は、ハッと気付いたかと思ふとすぐに頭を下げて謝罪をして来た。そういうのは良いので、早く案内して欲しい。

こうして、案内人が2人に増えた私は湯婆婆様とやらの所へ向かう事になった。名前からお婆さんである事は間違いないので、優しそうな人と良いと思った……

## 交渉は慎重に

のつぺり、のつぺり、黒い影、またのつぺり。あ、巨大ヒヨコだ可愛い。

現在、湯婆婆様がいると言われているこの建物の最上階へと向かっている私達だが、何故か従業員らしき者達が遠巻きにこちらを伺っている。お客様達は私の事を総スルーなのにも関わらず、この違いは何なのだろうと首を傾げるも考えても分からないものは分からないので目の前の貴族服の男、兄役という役職らしいのでこれからはそう呼ぶ……に質問する事にした。

「まあ、人間が油屋に来たのは滅多にないと言うか……私は初めて見ましたからね。皆、物珍しさから見ているんでしょう。……私の仲間が失礼を致しました。」

「いや、それは別に構わないですけど……じゃあお客様方は逆に何でそうではないんですか？」

「ああ……お客様方はあまり他の事に気を向けませんからね。その生まれから人間と関

わりの深い方達もいらつしやいますし、どちらかと言えば好意的な目を向ける方が多いのではないのでしょうか。」

それは従業員は好意的ではないという事ではないだろうか。……まあ別にいいか。

通路の真ん中を堂々と歩いて紅く綺麗に染められたエレベーターに乗ると、それはぐんぐんと上昇して行く。途中の階で止まる事もあつたが、人間が乗つてると気付くと快く辞退をしてくれて、更に同乗する者はいなかつた。

「さて、この先が湯婆婆様のお部屋になります。私はこれで失礼させて頂きますね。」

そう言つて兄役はそそくさと逃げる様にいなくなつてしまつた。

「じゃあ俺もこれで……な、何でしょう。」

カエルの方を見ていると、何故か怯えられてちよつとだけ傷付いた。

「君、名前は何て言うの?」

「おつ、俺は青蛙です……はい。」

「そう、私は千尋だよ。じゃあ青蛙、また会おうね。」

「ひえっ……はっ、はいっ!」

ペコリと頭を下げて、こちらをチラチラと確認しながら去つて行く青蛙に思わず苦笑いをしてしまう。何だかんだ気に入っていたのに、そんな態度を取られると寂しいじゃないか。

「さて、それじゃあラスボスとのご対面と行きますか。」

重々しい扉の前に立つ。取り敢えずノックをして用件を述べると、何処からかしわがれた声が聞こえて来て、入室の許可と共に扉が自然に開いた。目の前に湯婆婆様がいるのかとドキドキして足を踏み入れたにも関わらず、そこには誰もおらず高級そうな調度品が飾つてあるだけだった。豪華なシャンデリアは室内を暖かく照らして、壁一面に中世ヨーロッパの様な装飾が施されている。たまに設置されている壺も価値は計り知れず、私は絶対に触れないでおこうと心に決めた。

「あれ、この絵もしかして……………」

壁に他と比べて1つだけ大きな絵が飾られていた。銀髪の徹子さんの様なお団子頭のご婦人の絵が描かれているが、この人が湯婆婆様だったりするのだろうか。もしくはその家族が大切な人なのかもしれない。ただ、この絵の人物が湯婆婆様だった場合、厳しそうな女の人だが取り敢えず人型で良かったと思つた。

さもどうぞこちらにと言わんばかりに、扉が開かれているのでどんどん奥に進んで歩いて行くと、それらしき部屋が見えて来た。恐る恐る中を覗いて見ると、突然何かが接近して来たので思わず足を出してしまった私は仕方ないだろう。最早条件反射であつた。

硬いがぐにやりとした感触に眉を顰めて、私が蹴り飛ばしてしまつたそれを確認する

と、髭面の男の生首が転がっていた。もしかして殺ってしまったのだろうか顔を青くするが、生首は暫くすると起き上がって辺りを「おいっ、おいっ」と言いながら跳ね始めた。取り敢えず害は無さそうなので、ごめんねと謝ったが返事は変わらず「おいっ」なのでやはり許してはくれないのだろう。良く見れば、他にも同じ生首が2体部屋を同じ様に跳ね回っている。殺した訳じゃなかったかとほとと息を吐くと、部屋の置くからくつくつと笑い声が響いた。

「いやあ、そいつを蹴り飛ばすとは中々足癖の悪い小娘だねえ。」

部屋の奥に備え付けてある机に肘を付いてこちらを見て笑っているのは、先程の絵よりも随分と老け込んではいたが湯婆婆様で間違いない筈だ。

「何か今、失礼な事を考えなかったかい？」

「いえ、そんな事ありませんよ。この子を蹴ってしまつてすみませんでした。ちよつと驚いてしまつてつい足が出てしまいました。」

どうやら湯婆婆様は素晴らしい勘をお持ちの様だ。危なかった……。

「……まあ、いいさ。それじゃあ早速、魔法とやらを見せて貰おうじゃないか。」

「いえ、その前にお話があります。」

「……何だい？ お前の両親の呪いなら解く気はないよ。あいつらは神への貢物を勝手に食つちまつたんだ。豚になって当然だね。」

人間の男女が捕まって急に10歳の子供が現れたら、家族だとバレルのも仕方ないか。それにしても、あの黒い影は神様だったのか……てつきり幽霊か何かかと思つていた。

「いえ、両親とは関係ありません。私を貴女の弟子にして欲しいんです。」

「ほおう……弟子にねえ？」

そう、弟子である。周りの反応を見た所、私の魔法は中々なのではと考えているし、魔法を学ばせて貰つたら両親の呪いを自力で解く事も出来るようになるのではと考えたのである。

「勿論タダでは言いません。私の安全を保証した上でしたらある程度の仕事は請け負いましょう。若輩ながら大体の事は出来ますよ。」

「ふん、小娘が生意気を言うじやないか。」

「まずは私の魔法を見て下さい。それを見ても私には価値が無いと思うのでしたら、どうぞ豚になり何なりして下さつて結構です。」

まあ、大丈夫だろうと思うからこんな大口を叩けるのだが。

「じゃあ見せて貰おうか、お前の魔法を。これだけ言つてやっぱり使えませんでした、何てなつたらギタギタに引き裂いてやるから覚悟をし。」

ニヤリと口の端を釣り上げる湯婆婆様に悪寒を覚えながらも、1つ息を吐いて心を落

ち着ける。もう殆ど服が乾いてしまっていたので、従業員の方に快く献上して貰った酒瓶を取り出すと、その蓋を開けて中身を勢い良く床に零した。

とんでもない無礼を働いている自覚があるが、いまだ咎めようとせずこちらをじっと見ている湯婆婆様に感謝すると、酒をどんどん吸収して行く豪華なカーペットに手を当てて念を込めた。すると、カーペットに染みていた酒がフワリと浮き上がり始めて空中に大量の粒が漂う。少しだけアルコールの匂いにクラつと来た私がそれらに手をかざすと、やがて粒は一つの大きな塊となった。折角なのでアンティークが好きであろう湯婆婆様が好みそうな装飾の施されたゴブレットの形にしてみると目を見開いて驚きを表す姿が視界に入り、心の中で秘かにガッツポーズをした。

ある程度ゴブレットを維持すると、床に立てて置いておいた酒瓶を再び持ち上げて念を込める。すると、ゴブレットが少しずつ線状になって酒瓶の中に戻って行った。

「……以上になります。いかかでしたか？」

「……あつはつはっ!! こいつは驚いたね、あんた本物じゃないか!!」

突然大きな声で笑い始めた湯婆婆様に軽く距離を取りつつも、何とか価値は認められた様で安心した。自信はあったが、だからと言って不安がない訳でもなかったのだ。

「これは良い拾い物をしたかもしれないねえ。……ハク、入って来な。」

「はい。」

全然気が付かなかつた。私がさつき入つて来た入口にいつの間にか立つていたオカッパ頭の青年は、私と視線が合う事もなくスタスタと湯婆婆様の机に歩いて行くと立ち止まった。

「こいつはあたしの弟子のハクだ。あんたの兄弟子になる。」

「ハクだ。宜しく頼む。」

くるつとこちらを向いて頭を下げた青年は、それだけ言うと頭を戻して何故か少しだけ悲しそうにこちらを見つめた。

「あ、私は……」

名乗るべきなんだろうが、ここで自分の本名を明かせば自分の首を絞める事にならないか？ 昔から名前には呪術の触媒になったりと人を縛る力があるとされている。従つて、絶対に教えてはいけないものだがここで答えないのも拙い。

偽名を名乗るのも手かもしれないが、湯婆婆様の前では嘘だとバレて痛い目を見る気がしてならない以上、難しいだろう。

「私は……萩野千尋です。こちらこそ宜しく願います。」

これで、私の名前を知っているのは青蛙の他にこの2人も追加された。前世の名前はまだ誰にも教えてはないけど、それも知られたら本格的に命の危険がある。これから特に用心しないといけないな。



ヒュツと紙とペンが湯婆婆様の元から飛んで来る。これにサインをしろつて事だろ  
うか？

「契約書だよ。さつさとそこに名前を書きな。」

契約書とは言っても真つ白なのだが……これに名前を書けとは、いささか詐欺が過ぎ  
ないか？ 湯婆婆様を疑念を抱いた目で見つめてもさつさとしろと言われてしまい、仕  
方が無いので自分の名前を偽らずにサインした。

すると、紙とペンがスツと湯婆婆様の元へ戻つてしまふ。何やら湯婆婆様が紙に手  
かざしたと思つたら、紙から文字が浮かび上がり、それを片手で潰した。そしてまた、こ  
ちらに來た紙には千の「文字が。」

「千……これからはそれがあんたの名前だよ。」

千という文字だけが、紙の上に書かれていた。

「暫くの間はハク、お前が千に色々と教えておやり。私は仕事が忙しいから当分は面倒  
を見てやれないよ。」

「あ、宜しくお願いします……。」

取り敢えずと思つて挨拶をしたが、ハク様は少し頷いただけだった。

「ちなみに、さつきは酒を使つていたけど他のものでも出来るのかい？」

「最初に手で触れる必要はありますが、水分を含んでいれば何でもある程度の量は操る

事が出来ます。」

「ふうん、なるほどねえ。……それじゃ、あんたに任せる仕事については後で知らせるとするよ。」

「はい、頑張ります。」

「さあ、そしたらこの部屋からさっさと出て行く事だね。あたしや、仕事が忙しいんだ。邪魔をしないでくれ。」

しつしつと手で払う様な仕草を湯婆婆様がすると、私とハク様は後ろから押された様に強制的に來た道を引き返させられ、気が付けば最初に私が開けた扉が背中中で閉められていた。

「……行くよ。」

「あつ、はい。」

正直、魔法で追い出されたのがかなり恥ずかしかったのだが、何処と無く機嫌が悪そうなるハク様の後に私は黙って付いて行くしかなかった。

## 怒りと優しさと

パシン

障子が勢い良く閉められて唯一の出入口が塞がれた。先程通って来た廊下には誰もおらず、静まり返っている。

完全な密室を作り出した本人は、今私の目の前で肩を震わせてこちらを睨んでいる。どうしよう。控えめに言っても怖い。美人が怒ると怖いって本当だったんだ。

「あの、何を……………」

「そなたは……………」

「はい？」

「そなたは自分が何をしたのか分かってるのか!？」

「っ!!」

あまりもの大声に思わず肩が跳ねた。

「湯婆婆の弟子になるなんて……………そなたは、そなたは人間の子供なのに!!……………そんな

……何で……」

「つあの、そんなに心配しなくても別に大丈夫ですよ。私って結構図太いというか……タフなんで。」

大声で怒ったと思つたら何やら俯いてブツブツと話し始めたので、慌ててフォローをする。大丈夫かこの人、情緒不安定というやつだろうか。

「全然大丈夫じゃない！ 君は湯婆婆がどれだけ恐ろしい存在なのか全く分かっていない!! 君は、逃げるべきだったんだ!! こんな危ない事をする必要なんてなかった!!」

「っそれは両親を見捨てろつて事ですか?! そんなの嫌です!! あの人はこんな私を愛してくれた! 私はおかしいのに……それでも大切に育ててくれた!! そんな人達を見捨てるなんて出来る訳ないじゃないですか!!」

ハク様の言葉に、流石に言い返さない訳にはいかなかった。私に逃げろだなんて、この人は残酷な事を言う。

転生して、よく分からない力まで持つてしまった子供を愛してくれたそんな両親を見捨てられてたら私はここにはいないのに……

「っそんな事言つてないだろう!!」

「でもっ、そう言う事です! 私は、私の両親を助けるために精一杯やって来た! それを貴方に咎められる資格はありません!!」

「それは……でも……他に方法が……」

「確かに他にも方法があったのかも知れません。これが正解かなんて私にも分かりません。……でも、私は私が考えた精一杯でこの方法にしたんです。……今更何を言っても無かった事には出来ませんよ。」

最後は言い聞かせる様になってしまったが、これが私の本心だ。確かに私の今の立場は非常に危ない。たかが人間の小娘がこちら側の存在と対等にやりあえるとは思っていないし、きつと命を賭ける事もあるだろう。だけど私は私のした選択に後悔はしていない。無茶でも無謀でも、何でもやって、それで元の場所に両親と帰るんだ。

私の言葉に俯いてしまったハク様は、暫くの間ぐるぐると考えていた様だが、はあと重い溜息を吐くと私に向かい合って頭を下げた。

「……………ごめん、君の言う通りだ。傷付ける様な事を言つてすまない。」

「いいえ、別に気にしてないです。…ほら、私凶太いですし。」

「ははっ…本当だね。」

「……………そこは否定しておく所ですよ。」

「あ、すまないっ…………」

ハク様は天然なんだろうか……。だけど、わたわたと慌てている表情に、先程までの曇った影が鳴りを潜めたので良かった。

「ふふふつ」

「……何も笑わなくても良いじゃないか。」

怒っていた訳じゃないと気付いたのか、ハク様の慌て様に笑ってしまった事を咎めて来たが、口が尖って拗ねた様な表情は何だか可愛らしかった。

「ご、ごめんなさつ……ふふつ何だかハク様が可愛いらしくて。」

「かわつ!?……嬉しくない……」

私が笑い過ぎたせいか、余計に拗ねてしまっているハク様に少しだけやり過ぎたかと思ひ直す。

「……ハクで良い……」

「はい?」

「だから、様なんで付けないでハクで良いよ。そちらの方が私も嬉しい。」

「……わ、分かりました、ハク。」

「敬語もなしだよ。」

「え、ええとそれは流石に……兄弟子ですし。」

見た目の歳はそう離れていないとは言え、実年齢はとんでもなく上なんだろうし、名前呼びもただけど兄弟子にタメ口はちよつと拙いんじゃないか?

そう思ったのだが、ハク様は、いやハクはこつちを不服そうに睨んでいる。これは私

が折れるしかないのか……

「分かったよ、ハク。じゃあ私も君じゃなくて千って呼んで欲しい。」

「っ！」

私が出た言葉に何故か、とんでもないものを見た様な、驚いて警戒した表情になったハクにこちらのほうがびっくりしてしまった。

そ、そこまでの反応をされると……少しへこむ。

「あつ、流石にそれは駄目だった?! ちよつと凶々しかったよね、ごめん！」

「……いや、そうではないけど……千は自分の本当の名前、忘れてしまったのかい?」

「本当の名前? 何の事?」

どういう意味だろうか? 本当の名前も何も、私は千以外の何者でもないのだが……

「っ萩野千尋、そなたの名前だろう……?」

「えっ?……あつ……っ！」

「湯婆婆様に名前を取られたんだ。自分の名前を忘れてしまえば元の場所に帰れなくなってしまうよ。」

「私……本当に自分の名前が分からなくなってた……。」

最初に自分の本当の名前を聞いても何も感じなかった……。今回は思い出せたから良いけど、その内に自分の名前をちゃんと認識出来なくなったらと考えると恐ろしい。

萩野千尋、萩野千尋……私は萩野千尋だ。嫌だ、私が私じゃなくなるかもしれないなんて……想像しただけで怖い。

「そなたは萩野千尋。本当の名前は決して忘れてはいけないよ。2人きりの時は私は千尋の本当の名前を呼ぼう。」

「あ、ありがとう……ハク。」

優しく笑ってそう言ってくれたハクに、私は救われた様な気持ちになった。だって、とてもとても怖いんだ。自分の名前を無くしてしまっただらと思うと……自分が元に帰れなくなったらと考えると……怖いんだ。

「だけどハクが、私の名前を呼んでくれれば忘れる事はないんじゃないかって……そう思ったんだ。」

「大丈夫だよ、心配しないで。私は千尋の味方だよ。」

ハクに名前を呼んで貰えれば、私が私でいられる……ハクがいれば私は頑張れる……そう思ったんだ。



## 部屋が1つ

「あの……………ここは?……………」

ハクに案内された部屋は湯婆婆様の部屋の下階にある眺めの良い綺麗な1室だった。だったのだが……………

「千尋には、これからはここで寝泊まりしてもらおうよ。」

机にタンスにその多諸々、家具が揃ってるのは良い事だと思う。思うのだが、それだけではなく生活感が感じられるのは何故なのだろうか。チラリと覗いたゴミ箱には、生ゴミが袋で捨ててあった。おい、間違いない人が住んでいるぞこの部屋。

ハクをじろりと睨むと、観念したのか顔を伏せて深い溜息を吐いた。

「最初に言っておく。私はちゃんと言ったんだ。部屋はどうしても別が良いって。」

「えっ、それってまさか……………」

「……………ここは私の部屋だ。」

「……………」

思わず、黙った私は悪くない。

「……っ大丈夫！ 私は廊下にも布団を敷いて寝よう！」

「いや、それは流石に！……あつ、女性の従業員もいたよね？ その人達と一緒に部屋のじゃ駄目なの?！」

「あー……ここは階級が激しくて、私達が彼等と一緒に過ごす事はあまり良くないんだ。」

「……他に空いてる部屋とかは?！」

「それがあつたら、こんな事にはならない。」

「ソウダヨネー。」

なんて事だ。まさか異性と同じ部屋で寝食を共にする事になるとは思わなかった。前世も今世も1人っ子の私には、いささかハードルが高すぎるぞ。

「……やっぱりは廊下で「いやつ、だからそれは拙いって！ 湯婆婆様の弟子が廊下に寝てたら従業員達もびっくりしちゃうでしょ?!」

「……それもそうか。」

納得してくれた様で良かった。もしそれを実行されたら、私が兄弟子を部屋から追い出して爆睡した女になってしまう所だった。そんなのハクがいたたまれない上に私が嫌過ぎる。

これは苦渋の決断だけど、受け入れるしかないのか??

「はあ……まあ、気にするけど、良いよ別に。」

「えっと、それは……」

「だから2人で一緒に部屋でも良いって事！ お互い着替えの時は外に出てればそれほど不便でもないでしょ？」

思わず語尾が荒くなってしまう。いやだって、自分で言っていて恥ずかしいんだもの。何で私はハクと一緒に部屋で寝る事になったんだ?? いや、原因は分かっているけど

……

「そ、そうだね。……うん。」

「そ、そうだよ。はは、何だ、大した事ないね……」

2人して前向きに肯定はしたが、何処かぎこちなさが漂う。

「それじゃあ、これからも宜しくお願いします？」

「こ、こちらこそお願いします？」

夫婦か。思ったけど、賢明な私は口には出さなかった。

「はははは……」

「ははははは……」

「はは……」

「……。」

何だこれ、気まず過ぎるぞ。何とか、何とかこの空気を一新出来ないだろうか……

「あ、じゃあまずはここを案内するよ。まだ、全然回れてないでしょ?」

「是非お願いします! 私、この事すごく知りたい!!」

そんなに知りたかったのか……と呟くのは辞めて欲しい。天然か。気まずい空気を何とかしなかった私にとつては渡りに船だったんだ。だから、適度に教えてくれれば良いから気負わなくても良いんだよ? ハク……

## 愛とは

湯婆婆様の部屋は勿論、お客様の座敷、温泉施設、調理室、食料庫、庭園など……想像していたよりもずっと広く様々な部屋があつて、すっかり興味深々にあたりをキョロキョロと眺めていた私は、さっきまでのぎこちなさを忘れて楽しんでいた。

「次は何処なの？」

「次は釜爺の所だよ。」

「釜爺？」

「うーん、足が長くて沢山あつて……ちよつと見た目は怖いかもしれないけど、優しくて良い人だよ。」

足が長くて沢山あるつて、何だか蜘蛛みたいだな……。確かにそんな人がいたら怖いというか、少し引いてしまうだろう。

「ああ、こゝろだね。」

ハクが横に開けた扉は、何故か足元に小さく設置されていたもので、疑問に思いながらも私はハクの後が続いて中に入り、そつと扉を閉めた。

「ハクです！ お仕事すみません！失礼します！」

恐らく部屋の奥から聞こえて来る音のせいなんだろうが、ハクが普段よりも大きめの声で呼びかけをした。

「し、失礼します。」

私も取り敢えずと挨拶をしたが声が小さくなってしまったので、相手に聞こえたかは怪しい。

炉の炎が燃え盛り、廊下と比べると流石に部屋の温度が高くなった。部屋の中は視界の暴力と言うべきか、ツツコミ所が多すぎて対処出来ない。まっくろくろすけが仕事してる?! とか、まっくろくろすけ自分より重いもの運んでるけど平気なの?! とか、釜爺さんの手足が伸びてるんだけど、ゴムゴムの実でも食べたの?! とか、グラサン似合ってるな! とか……もう、きりがなさ過ぎて、私は間拔けに空いていた口を閉ざした。現実逃避とも言う。

「何だハク、わしゃ忙しいんだ。用があるなら手短にせい。」

長い手を忙しなく動かしながら顔を目の前のすり鉢に固定したままで、釜爺さんが話す。比喻じゃなくて本当に忙しそうだ。

「新しく湯婆婆の弟子になった子を紹介に来たのです。この子はまだ小さい人間の子供なのに湯婆婆の弟子になってしまったので、少しでも力になってやってくれませんか？」

「新しい弟子い？」

やっところちらを見て、私の存在に気付いたのか目が合った。

「はじめまして、萩野千尋です。こちらでは千と呼ばれています。」

「わしゃ釜爺だ。風呂釜にこき使われとる、ただのじじいだ。」

隣のハクから痛い視線が送られて来る。いや、名前を隠さなきゃいけないのは分かっているけど……ハクが紹介してくれたのだから悪い人ではないだろうし良いじゃないか……。私は人とは誠実に向き合いたいんだ。

「お前さんも分かっと思うが始めに言っておくぞ。わしゃあ見ての通り忙しいんだ。だから千尋にも構ってやれる時間はない。」

「はい、それで大丈夫です。もしも私に何かあった時にほんの少しでも千尋の力になってやって下さい。」

何かって何だ……ハクの立場が危ないものだっていうのは理解しているけど、そんな事を言ったらまるで自分がそうなって当然みたいじゃないか。だから私はハクにお返しをする事にした。

「釜爺さん、私からもお願いします。私はこちらの事をあまり知らないのだから……だからもしハクが危ない事をすると思付いたら、私に教えて下さいませんか？　お願いします。」

「なつ、千尋……それは「ははつ、こりやあハクも一本取られたな!!」」

作業を中断した腕の2本で、手を叩きながら上機嫌な釜爺さんに褒められると、私も悪い気はしなかった。

「ありがとうございます。それで……お願い出来ますか？」

「よおーく分かったよ。わしにどーんと任せとけえー!」

心強いお言葉を頂けて何よりだ。釜爺さんはハクが言っていた通りに、見た目は強面だけど面倒見が良くて、良い意味で人間臭い人情に厚い人なのかもしれない。

ふとハクを見ると、顔を背けていたが、耳が赤いのがバレバレだった。何だこの可愛い生き物は。

「愛だなあ……。」

何だかおかしい言葉が聞こえた気がしたが、気の所為だろう。無視だ無視。老人の戯言に構ってられるか。

ハクもお願いだから更に耳を赤くしないでくれ。私まで恥ずかしくなってしまうじゃないか……やめ……やめてくれ……頼むから……



## つづきは夢の中

布団は敷いた。着替えも準備した。風呂にも入った。さて、どうしようか……

「どうしたの？ 千尋、もう遅いから寝よう？」

「ああ、うん……。」

あれ？ さっきまでの純情なハクは何処に行ったんだ?? 何で特に気にしてないの？ 最初、廊下で寝るとか言ってよね?? もしかして、私がおかしいのか?!

モヤモヤと考えてながら取り敢えず布団に潜る。流石というか、湯婆婆の弟子クラス  
の階級の布団は、私の家の物よりもふわふわで暖かかった。

ハクが電気を消してくれて、お休みと声を掛けられたので私もお休みと返す。取り敢  
えず目を瞑ってはみたが、とても眠れる気がしない。ハクじゃないけど、廊下に布団を  
敷いて寝ようか……

「ねえ千尋、もう寝たかい？ ……流石に眠ってるか。」

眠ってる判断がお早い!! これは起きてると言った方が良いんだろうか。時間が経てば経つ程に言い出し辛くなるのだから、言うなら今しかないよね？」

「私は自分の名前を忘れてしまったんだ……だからもう元の場所へは帰れない。」

「っあー……完全に言うタイミングを逃した。これ、私が聞いてないと思ってるから言ってるんだよね？」 耳を閉じておいた方が良いだろうか？

「だけど、ちゃんと覚えている事もある。昔あった楽しかった事や悲しかった事、その思い出は忘れてはいない。」

「そう言えば、ハクはいつからここにいるんだろうか。私みたいに最近来た訳ではなさそうだが……」

「……あの子には本当に悪い事をしてしまった。最初に千尋を見た時は本人じゃないかってびっくりしたんだ。だって見た目も魔法もそっくりだったから。」

あの子？ 一体誰の事だ?？」

「名前も苗字も違うからただ似てるだけなんだろうけど、本当に驚いた。だってもう、会える筈は無かったから……私には会う資格すらないしね。」

私とそっくりで魔法を使える女の子。ハクはその子に何か良くない事をしてしまったらしい。その話を聞いて私は、ハクが本当はその子にもう一度会いたいのではないかって思った。だってその子の事を話すハクがあまりにも寂しそうだから……

「千尋とあの子は違うって分かつてはいるのだけど、どうしても重ねて見てしまう。ごめんね……千尋は千尋だよ。今日、湯婆婆と釜爺とのやり取りを見てて気付いたよ。千尋はあの子とは違うって……あの子はとても優しかったから……」

おい、それだと私がまるで優しくないみたいではないか。まあ、聖母の様だとは言わないけど、流石に酷くないか……

「千尋は強いね。本当に強い。私よりも全然年下なのに全く叶わないよ。……私も千尋みたいに、強く……なり……た……」

「えっ嘘、そこで寝るの?！」

結局、何だったんだろうか……何だかどつと疲れた気がする。そう言えば今日は波乱の1日だったから、随分と疲れが溜まっているみたいだ。自覚すると、睡魔が私にも襲って来た。

大きな欠伸をして、ついでに凝りをほぐす。ハクが結局の所、何を言いたかったのかはさっぱりだが、明日からも頑張ろうと思って瞳を閉じた。

## お母さんとお父さん

翌朝、目が覚めると隣の布団は既に綺麗に畳まれていた。ハクは何処に行ったのだろうか……

「ふああく……んっ……。」

欠伸を一つして、布団から身を起こす。取り敢えずハクと同じように布団を畳んで横に並べると、備え付けの洗面台で顔を洗った。鏡で自分の顔を覗くも、そこにあるのは母譲りの自分自身の顔だけだ。

「豚にもなつてないし、薄くもなつてない。影もあるし、何もおかしな所はないな。」

気休めかもしれないけど、こうやって口に出すと安心する事が出来る。私はまだ大丈夫、まだ元の世界に戻るって。

「私は萩野千尋。千はここだけの名前で本当の名前じゃない。」

確かめる様に、自分に言い聞かせる様に呟いた言葉は、何だか頼りなかった。ハクに、

名前を呼んで欲しい……そうじゃなきゃ、今の私は凄く不確かであやふやだ。

私服のポケットに入っていた、引つ越す前の友達の理沙ちゃんに貰ったカードには、可愛い字で「ちひろへ」と書いてあった。いつか、この名前が自分のものだと感じなくなってしまう気がして怖い。

頭を振って嫌な想像をかき消すと、思考を切り替えて意識して明るい声を出した。こういう切り替えの良さは、私の数少ない美德だ。

「本当にハクは何処に行つたんだろう？ 調理場の方かな……」

着替えを済まして、おかしな所がないか姿見で確認する。昨日の夜に届けられたこの服は、ハクとお揃いみたいで少し気恥ずかしかったが、着てみると案外似合ったので少しだけ気分が上がった。

ハクが水色なのに対して、私はピンクのズボンを穿き、袖はノースリーブというデザインの服は昨日、女性従業員のの方が急いで仕立ててくれたものらしい。私もボタン付け位なら出来るが、服は作った事がないので、素直に感心した。

髪をきつく縛ると気合いを入れて顔を叩く。パシンという音と共に今日も頑張ろうと「よし！」と意気込んだ所で襖をノックする音が聞こえた。丁度ハクが帰って来たらしい。

「どうぞー。入っても大丈夫だよ。」

笹の包みを抱えて入って来たハクは、私がもう起きているのかと驚いていたが、仕方ないではないか。普段から早寝早起きを習慣付けて老人の様な生活を送っている私の起床時間は朝の3時なのだ。今日はもう7時なので、充分寝坊したと言えるが、昨日寝た時間も時間なので仕方ない。

「もう、身支度は済んでるね。これから千尋のお父さんとお母さんに会いに行かないかい?」

「えっ、本当に? 行く、行きたい!!」

きつと両親はまだ豚の姿のままだとは思っただけで、それでも会いに行きたかった。会って何が変わるという訳でもないけど、強いていえば私の罪悪感の問題だ。

別に急いでいる訳ではないので、エレベーターを使わずにハクと階段で下に降りる。昨日とは違って変わり、従業員やお客様方は全くいない静かな道だった。きつと基本的な活動時間が夜なのだろう。お客様は帰ってしまったのかもしれないが、従業員の方達は未だ布団の中なのかもしれない。

ふと、庭園の橋に差し掛かった時に、黒い影にお面を付けた様な存在がこちらをじつと見ているのに気付いた。今まで黒い影は私の事をスルーしていたので、少しだけ気に

なったがハクが無視して先に進むので会釈だけして付いていく。

「ハク……さっきのは何だか分かる？」

その質問に何故かハクは答え辛そうな顔をして、短く答えた。

「あれは多分……カオナシだよ。」

「カオナシ？　ちゃんと顔はあつた様に見えたけど……」

黒い影にそっくりだけど、見た目で大きく違うのがそこだ。黒い影の中には目と口が付いている個体もあつたが、それは薄ぼんやりとしていて、カオナシ程はつきりとはしていなかった。

それに黒い影は日中は見かけなかつたのにも関わらずカオナシは堂々と日の下を歩っている。ここまで違うと全く別の個体と考えた方が良いのかもしれない。

「あれは面をして、自分を誤魔化しているだけだよ。カオナシには己というものがない。だから他人に寄生して、あたかも己がある様に振舞おうとするんだ。……千尋は危ないから決して近付いてはいけないよ。」

「分かった……気を付けるね。」

ハクの言い方にハクラしくなくトゲを随分と感じたが、それだけ危険な存在なのだろうと結論付けて、私はしっかりと頷いた。ハクも私の返事を聞いて安心したのか、一旦この話は置いておいて庭園に咲く花を紹介し始める。

……確かに綺麗に咲き誇ってはいるが、紫陽花、ツツジ、梅、椿って……四季が乱れるにも程があるんじゃないか？ ……ここがこっち側の世界じゃないと言う事がひしひしと伝わって来て、素直に綺麗だとは思えなかったのが少しだけ勿体なく思った。

そしてハクにそのまま連れられて行った先には養豚場があつた。ここで本物の豚の様に両親が飼育されていると思うとやるせない気持ちになつて来る。私をもつと何か出来ていれば、今頃家族3人で引越し先で新生活の朝を迎えられたかもしれないのに……

「これが千尋の両親だよ。」

「お母さん……お父さん…………」

そこには餌を食べて満足したのか、床で気持ち良さそうに寝ている両親？の姿があつた。以前見た時の様に髪は生えていないし、服も着ていないしで正直見分ける事は出来なかつたが、ハクが言うのだからそうなのだと思う。

パツと見た感じでは怪我もない様だし餌も充分に貰えている様だしで、思っていたよりは環境が悪くなくてほつとした。

「ハク……お母さんとお父さん、私の事を忘れちゃつたのかな……」



商店街で料理を食る2人に私の声は全く届かなかった。もしかしたら、身も心も豚になつてしまつたんだろうか？ 心だけは人間のままの方が精神的には辛いのもかもしれないけど、心も豚になつてしまうなんて、あまりにも哀れだと思つた。

「人間だつた頃の記憶を今は忘れているんだ。……でも大丈夫だよ。いつか2人を助け出したら、記憶も一緒に戻つて来る筈だからね。」

「本当に?! そつか………良かった。」

少しだけ希望が見えた。未だ両親の呪いを解く方法は分からないし、先行きも不安なままだけど、私の弱みという価値がある以上、両親が簡単に殺されるとは思えない。

そもそもこれだけの数の豚がいるのだつたら、わざわざ私の両親を料理に出す必要もなさそうだ。それに湯婆婆様は両親が神様へのお供えの料理を食べた罰として豚の呪いを掛けたと言つていた。わざわざ殺すのではなく豚にしたのは、そう言う制約でもあるのかもしれない。

暫くの間両親を眺めていた私だが、ハクに声を掛けてその場を離れた。もう良いのかと聞かれたが、もう良いのだ。だつてこの豚は私の両親であつて両親でない。私が話しかけても、私を私と認識出来ない両親の元においても、私が彼らに甘えてしまうだけで生産性がない。逆に両親が私の弱みであるという事実がある以上、あまり関わらずにそつとしておくのが1番だろうと考えた。

「千尋、ここでご飯にしないか？ おむすびを作って来たんだ。一緒に食べよう。」  
「わっ、いいの？ 勿論頂くよ！ ハクが作ってくれたなんて嬉しいな！」

ハクが抱えていた笹の包みの中身が気にはなっていたが、まさかおむすびだとは思わなかった。笹で包んだおむすびなんて初めての経験だ。綺麗な花の庭園で食べる笹に包まったおむすびに、私のテンションがうなぎ登りになるのも仕方なかった。

ハクが包みを外すと、中から出てきたのは少し大きめの塩むすび。既に冷えて来てしまつて握りたてではなかったけど、おにぎりは冷えた方が旨みが出て美味しいし大丈夫だろう。

ハクは塩むすびを一つ、私に渡すと何故か自分は塩むすびを手にとらずに私を見つめていた。……これは私が食べた反応を見た後で自分も食べるというやつだろうか。取り敢えず一口を口に含まとふわふわのご飯と丁度良い塩の味が口に広がった。何だろう……素材本来の味が活かされているというか……美味しい。それから早いもので、次第にパクパクとスピードがのつて行き、すぐに一つを平らげてしまった。いや、そう言えば昨日は何も食べてなかったから……だからお腹が減っていたんだ。だからそんなに微笑ましそうなる顔をしなくても良いじゃないか……あ、もう一つくれるって？ ありがとう……

3つあった塩むすびの2つ目を私が食べ始めるといふ、女子にあるまじき行為を私が

働きなから、ようやくハクも塩むすびを食べ始めた。

「このおむすび、千尋に元気が出る様になってまじないを込めて作ったんだ。……美味しそうに食べてくれて良かったよ。」

ハクが柔らかく微笑んで嬉しそうにするが、私はその言葉にドキツとした。

「えっ、私って元気が無さそうに見えた？」

ハクに心配されるほど顔に出ているのだろうか。塩むすびを持つのは反対の手で自分の顔に触れてみるがやっぱり分からない。

「いや、千尋はいつも笑ってるよ。ただ、何処か無理してる様に私は感じたんだ。」

「……それは……」

ハクに見透かされていた。私が何処か不安を抱えてるって事。足元がぐらついて、ふらふらしているって事。

「千尋は強い子だね。いつも一生懸命で自分の力で何とかしようとする。だけどね、たまには私にも甘えて欲しいな。私は千尋が甘えて頼ってくれた方が嬉しいよ。」

その言い方は何だか狡い。ハクに甘えるしなくなってしまうじゃないか。甘えちゃ駄目だって、迷惑をかけちゃ駄目だって思っていたのに……

「あのね……」

「うん。」

「両親をね、1回見捨てたの私。あれだけハクに言っておいて、最初に両親が豚になったのも見た瞬間ね、怖くて逃げ出したの。私、最低だよ。あの時湖が行く手を阻んでなかったら、きつと両親を捨てて元の場所に1人で帰ってた。」

ずつとモヤモヤしていた事がある。後からこの事に気付いた時に私は愕然とした。だつてあれだけ愛してくれた両親を見捨てて逃げ出したのに何も思わなかったなんて……私は薄情にも程がある。

「千尋は戻つて来たじゃないか。千尋はこつちに戻つて来て湯婆婆の弟子になる危険までして両親を助けようとした。もしの話は置いておいて、千尋が結果としてどう行動したのかが大切なんじゃないかな。大丈夫、私は千尋が両親を見捨てられる様な子じゃないって知っているよ。」

「……それは買い被り過ぎだよハク。私は結構狡いんだ。この話だつて、きつとハクなら私は悪くないって言つてくれると思つて話したんだ。……私は薄情で、酷い人間なんだよ。」

ハクが話してくれた内容に多少なりとも救われた自分がいたのに、こんな酷い返ししか出来ない自分が嫌になった。でも何故だろうか、ハクに私が良い人間だと、そんな風に言われると否定したくなるんだ。違うんだよ、私はそんなに綺麗な人間じゃないんだよつて。本当に何でなんだろう、変だなあ。

「千尋は……………いや、私は千尋がどんな存在であつても好きだよ。」  
「…………。」

私はすぐに顔をハクから逸らした。これだから天然は嫌だ。何でこんなに恥ずかしい事を臆面もなく言えるんだ?! 確実に顔が赤くなっている自信があつたので、熱い頬に手を当てて熱を落ちつける。

ふと爺爺さんの「愛だなあ」という言葉が浮かんで、慌てて首を振った。違う! これは性別を超えた友情的なそれだから! それにこんなに綺麗な顔をしているのだからハクが女の子の可能性もあるし!!

「千尋? どうしたの?? 具合が悪い?」

そつと心配そうにして来るハクに天然の恐ろしさを感じながらも、私はどうかか赤みの引いてきた顔で大丈夫と伝えた。まだ、ハクは心配な顔をしていたが、私が大丈夫と言うのでそれ以上は言及するのを辞めたみたいだ。ありがたい。

「千尋、やつぱり顔が少し赤くないかい?」

「いや、全然大丈夫! ハクのおむすびのお陰で凄い元気が出たよ!!」

握りこぶしを2つ作って再びなつてしまった赤い顔でそう捲し立てる私に、ハクは引き気味に「そっか、それは良かった。」と返した。死にたい。

## おしげと

勝手に入つて大丈夫かと心配したが、どうやら許可は得ているらしい。湯婆婆様の執務室にて、ハクに教わりながらも書類の整理をしている私だが、前世の知識もあつてか何とか捌く事が出来そうではつとした。

ハクは基本的に湯婆婆様の身の回りの雑用や帳簿の管理をしているらしい。恐らく更に危ない仕事もやっているのだろうが、それは私に教えてはくれなかつた。

「この書類はこつちで良いんだよね？」

「うん、大丈夫だよ。千尋は飲み込みが早いね。いつもはもう少し時間が掛かるのに、千尋のお陰でもう終わりそうだ。」

随分と嬉しい事を言ってくれる。まあ、普通10歳の女の子が書類を捌けていたらおかしいので、ハクの反応は当たり前のものだろう。

今は書類は湯婆婆様が担当するものとそれ以外に分けて、更にそこからハクが湯婆婆

様の書類を系統別に、私がそれ以外の書類を担当部署毎に分ける仕事をしている。中々量が多くて湯婆婆様が毎日これだけの書類と格闘していると思うと少しだけ同情した。個人経営はやっぱり大変なんだな。私は将来、社員の1人になろう。

ハクよりも先に書類を捌ききってしまい、取り留めもない事を考えていると、ハクの方も終わった様で書類を湯婆婆様の机に置いてこちらにやって来た。

「よし、じゃあ後はこの書類を届けないといけないんだけど、他の者達はまだ寝てるだろうから夜にやるよ。」

「うん、分かった。じゃあ次は？」

次の仕事は何だろうかとハクに尋ねると、ハクはとても言い辛そうに口を開いた。

「あー……次は、いつもなら見回りに行くんだけど、千尋は危ないから私達の部屋で待っていてくれるかい？」

「やだ。」

即答した私に、ハクが困った顔で笑う。何だその聞き分けの悪い子供を見た親の様な反応は。なけなしの乙女心が傷付くぞ。

「はあ……そう言うだろうと思つたよ。……何かあつても千尋は私が守るから、しっかりと捕まっているんだよ。」

何やら甘いセリフの後にハクの姿がどんどん変化して行く。白い鱗が生えて、胴が長

くなつて行つて、鋭い牙が生えて……気付くとそこには立派な白い龍がいた。

「……私が怖いかい？」

姿は違うがハクと同じ優しい声が私の耳を打ち、ついその美しさに見惚れていた私を現実に引き戻す。

「いや、全然。」

また、即答した私に今度は嬉しそうにハクが笑った。

私は首を傾げた。何でだろうか、怖いというよりも懐かしい様な、そんな気がしたのは……

空が青い、私の体を吹き抜ける風が気持ち良くて思わず伸びをしたら、ハクにしっかりと捕まっていなさいと注意をされてしまった。

現在私は龍へと変化したハクの背中にしがみついて、湯屋の周辺を見回っている。上



空から見ると、あんなに大きかった建物がちつぽけに見えて、何処となく私は気分が良かった。

見回りをしながらハクが色々な場所の説明をしてくれるので、会話も尽きず楽しい。ハクの説明は分かりやすく、つい私も感心してしまった。

「そうだ、あの電車は何処に向かつてるの？」

ついさつき湖の水を押し退けて進んで行った電車の方を見つめてハクに尋ねる。もう既に見えなくなってしまうが、日の明るい中で見た電車は、中々に綺麗で興味が湧いた。

「あの電車が向かうのは死の世界だよ。」

何処か寂しそうな表情でそう告げるハクに私は「そっか」と返すしかなかった。きつとあの電車に乗るのは、そんな悲しい人達なんだと気付いてしまったから。

「あつ、今魚が跳ねた！ 結構大きかったよ!!ここからでも姿がはつきり見えた！」

多少わざとらしくかったかもしれないが、それでも良いかと意識して明るい声を出す。

「本当？ 残念だな、私は見逃してしまつたみたいだ。」

私の意図が伝わったのか、言葉の割には残念そうに聞こえないハクの声聞いて、私はそつとハクの背に顔を伏せた。

私はいつかきつとハクを一人残して死ぬだろう。その時にハクがどんな顔をするか

と想像して辞めた。未来を嘆くよりも今を楽しんだ方がきつと幸せになれる……私は、私の名前を優しく呼んでくれるハクが傍にいただけで、満たされている気持ちになるんだから……

「ごめんね、千尋。」

## 不穩な影

「あれ？ 何で私、ここに居るの?？」

ふと目覚めると私の部屋のお布団の中。どうやら睡眠時間が足りてなかったのもあり、ハクの背中で寝落ちしてしまつて運び込まれた様だ。ハクの仕事に無理に付いて行つてしまったというのに、恥ずかしい。

枕元にあつたメモによると、ハクは別の仕事があるのでそつちに向かうという事と、朝仕分けた各部署への書類の配布は手伝いを寄越すのでその人に聞きながらやる様にと書いてあつた。

ハクの仕事がどんなものかは分からないけど、危ない仕事じゃないと良いなと思ひながら急いで支度を始めた。

「おーい、千いるかー? 入るぞー!!」

着替えの途中でノックと共に女の人の声が聞こえて、慌てて袖を通す。こちらが答える前に襖を開けたらノックの意味がないだろうと悪態をつきながら確認した女性は目がつり目がちなものの、とても綺麗な人だった。

「おつ、いたいた。本当に人間の小娘なんだな……つと、時間もないからさっさと行くぞ。」

「はいっ、あ、もう既に知っている様ですが私は千です。今日は宜しくお願いします。」  
取り敢えず礼儀として挨拶するが、何だか苦虫を噛み潰した様な顔で見られてしまったので、何か失敗してしまったかとたじろぐ。

「かぁーっ、そんなに畏まる必要はないって！ 俺はリン。こっちこそ宜しくな、千！」  
背中をバシバシと叩かれ、何だか見た目とは裏腹に男らしい人だなと失礼な感想を抱きつつも、悪い人ではなさそうでほっとした。これが前世で流行ったサバサバ系女子というやつなんだろう、きつと。

のっぺり、のっぺり、またのっぺり……昨日堂々と油屋の中を歩いた時よりもお客様はいなかった。恐らくこれからお客様方が御来店されて、どんどん増えて行くんだら

う。ここは温泉と宴会場のある娯楽施設みたいなので、1度入店すれば中々出る事は無い筈だ。

そんな開店前の少しだけゆとりのある時間のせいとか、昨日よりも更に従業員達の不躺な視線が気になる。リンさんは視線をもろともせず、ズンズン進んで行くので私は小走りで追いかけているが、私達が移動すると視線の先の従業員の集団も移動するので、さながらモーゼの十戒の様だった。

「取り敢えず、優先度が高そうなものから行きましょう。特に至急必要なものはありませんが……今日は天気が悪いので、酷くなる前に湯屋の外の用事は済ませておきたいですね。後は今日の大雨で玄関周辺が汚れるでしょうから追加の備品を手配したみたいですよ。これも早めに担当の者に渡したいですね。」

「うげっ、そんなに色々とあるのかよっ！ 案内をするだけって聞いてたから楽な仕事かと思ったら結構面倒臭そうだなー。」

私が腕に抱えてある書類の束を見て、女性とは思えない声を発したリンさんだったが、湯婆婆様の机にはこれ以上の書類があった。私は今朝方、あの老婆のバイタルテイの凄さを垣間見たよ。

ふと、歩っていた廊下の端に見覚えのある影が写った。

「カオナシ……？ 何でそんな所に……」

もう既に雨がしとしとと降り出しているというのに、外に突っ立っていて寒くないんだろうか。いや、そもそもそういった暑さ寒さは感じないのかもしれないが、何故わざわざそんな所にいるんだろうか……。

取り敢えずカオナシがこちらを何故かガン見してくるので会釈をするも、変化なし。  
ん？ 何か言っていないか?? 雨でよく聞こえないが、声が聞こえる気がする。もしかして迷い込んでしまったから開けてくれとでも言っているんだろうか。それならお客様だし、中へ入れてあげなければ可哀想だろう。

「すみません、こちらから中へお入り下さい。」

鍵を開けて窓を全開にすると、外の冷たい風が私の頬をなでた。やがてスツとカオナシが入ったのを確認すると、窓を閉めてきちんと施錠し、カオナシと私は向き合った。

「外は寒かったですでしょう。恐らくまだ開店はしてないと思いますので、お風呂は入れませんが室内でゆっくりして下さいね。」

「あつ……あ……」

「?」

何かを伝えたいんだろうか? ……先程からコミュ障みたいに「あ……」しか言わないのでよく分からないが、無難にありがとうとかかかもしれない。感謝の気持ちを素直に

伝えられないってよくある事だし。

「千ー！ 早く来いよ!! さっさとしねえと雨が酷くなっちゃうぞー!!」

「あつ、はーい! すぐ行きます!!」

いつの間にか先に歩って行ってしまったリンさんに慌てて返事をする、カオナシに謝罪をしてすぐに小走りで駆けて行った。

「あ…………あ…………」

## お腐れ様

皆が予想していた通り、雨はすぐに嵐となつて雷鳴が轟いていた。湯屋で働くのはカエルやナメクジが化けた者達が多いのもあり、こういつた気象予報は水と深く関わる彼らにはお手の物らしい。私も水に関する事には自信があるので、いつか身に付けられる日が来るだろうか。

「千ー！ 千は何処にいる?!」

「あつ、ここですよー！ ちよつと待つて下さいね。もう少して終わりますから。」

書類配布を終えた後、廊下の一部の雨どいが壊れているのに偶然気付いて、近くに誰も修理出来る人がいなかったなので私が直していた。もしかしてカオナシはこれを教えるために外で突つ立っていたのだろうか。よく分からないが、後で会つたらお礼を言つておこう。思いつきり雨に濡れる形にはなるが、私にとつては雨も水であるからには味方である。全身がキラキラしているのが光源の確保にも困らないし、基礎運動能力が上がるので、むしろ願つたり叶つたりだ。

「何をやってるんだ！ 湯婆婆様が玄関口でお前を呼んでいるんだ、早く行け!!」



「あとちよつとですから待って下さい。これが終わったらすぐに向かいますよ。」

折角ここまで直したのだから最後までやり遂げたい。さつきから父役の男性が煩いな。全く、気が短いと高血圧ですぐに死ぬぞ……いや、こちらの存在に死ぬも何もないのか？

相変わらず失礼な事を考えながらも手は止めずに私はさつきと修理を終わらせた。

「あ、その人すみません。道具を片すのお願いしても良いですか？」

「さつきとしろ！ 湯婆婆様をどれだけ待たせるつもりだ!!」

ナメクジ顔の女の従業員に後片付けを頼むと凄く嫌そうな顔をされたが、時間もないらしいので押し付けておいた。まあ、悪いとは思っているのですが、後で何かお礼をしてあげば良いだろう。葉の付いた紫陽花なんか、美味しそうで良いんじゃないだろうか。

「あー、でもこのままだとちよつと拙いか……。」

何せ全身びしょ濡れなので、このままでは廊下が大変な事になってしまう。梯子から降りて来た私が全身をキラキラさせてるのにギョツとした顔の父役の男性をスルーして、私は念を送ると自分に纏わり付く水を集めていつも通りの玉の形にして外に投げた。

これで生臭くもなくパリッと服が乾くのだから、便利なものだ。今思えば、昨日びしょ濡れになった時も、多少の水分は魔法用に残しておいて今と同じ様にすればあんな

に寒い思いをする事はなかったなと後悔した。まあ、今更である。

「どうしましたか?」 早く行くんでしよう?」

口を開けてポカーンとしている父役をつついてみるも、返事なし。命令口調で随分と遠慮がないとは思っていたが、もしかしたら私が魔法を使える事を知らなかったのかも  
しれない。

確か湯婆婆様は玄関口にいるのだったか……この男性がいなくても一人で辿り着けるし置いていっても構わないな。多分その方が早く着くし。

「あ、この人が復活したら、私が湯婆婆様の所に向かったって話しておいてくれますか?」

先程の女性についてに頼んだら思いっきり首を縦に振られた。やっぱり後で何かお礼をしておこう。

廊下を走る訳にもいかず、私は早足で湯婆婆様の待つ玄関口へと向かった。

「遅いっ!」

「すみません……それで、どうしましたか?」

正直父役がせつかちだから私を急かしていたのかと思ったが、この様子じゃ違うようだ。まだ少ししか会ってないとは言え、こんなに真剣な顔の湯婆婆様は初めて見た。

「お腐れ様が、今にも橋を渡つてここに来ようとしているんだよ。従業員がお帰り頂く様に言ってるが、ありやあ駄目だね。取り敢えず来ちまったもんは仕方ない。出来るだけ早く帰つて貰えるように、だれど失礼がない様にあんたがお出迎えするんだよ。」

お腐れ様？ 腐女子がここに攻めて来たんだろうか。それは大変だ。私の手にも負えるか……

「……私ですか？」

「そうさ、あんたの初仕事だよ。まさか出来ないなんて言わないだろうねえ？」

「や、やれます。やらせて下さい！」

大丈夫、私は女だから掘られる心配はない。気をしっかり持つていれば平気だ、きつと……

「み、見えました！ うっ……」

従業員の男性の声を聞いて、玄関の暖簾に顔を向けると鼻が曲がる様な異臭と共に泥の塊が侵入して来た。

「っ！」

「ぐっ……っよく、お越し、くだ、しゃいました……」

流石の湯婆婆様もこの匂いはキツイみたいだ。それも無理はない。私が想像してた以上の腐れ具合だ……まるでゲロを煮込んで熟成した後発酵させて、それを体にぶっかけられた様な……もう汚いを通り越して、歩く貫いゲロ生産機と化してる。

喉元まで通りかかったものを何とか堪えると、私も湯婆婆様の隣に立って何とか挨拶をした。お金と言って渡された泥の塊は私のS A N値を更にゴリゴリと削ってくれたが、1周回って気分がハイになって来たかもしれない。

「千ー、飯持って来たぞー……って飯がああー!？」

折角リンさんが持ってきてくれたご飯があつという間に腐って行く……これがお腐れ様の力。ご飯まで腐らせてしまうなんて恐ろしい……。そういえば前世の友達が机と椅子でB L本を描いていたっけ。

顔がチベットスナギツネにでもなっついそうな気持ちになりながらも、お腐れ様を奥の汚しのお客様の専用の風呂釜に案内する。

ザッパーンと勢い良く湯船に浸かったお腐れ様は、とても気持ちが良さそうに、成分のよく分からない、いかにも臭い気体を口から吐き出した。

「はい? どうしましたか?？」

何やらちよいちよいと手で何かをお腐れ様が伝えて来る。汚れるのが嫌でついたてとなつている壁に手を引っ掛けて体を支え、浴槽から流れ出した泥水を避けていたのだ

が、流石にこのままの姿勢で用件を聞くのは失礼かと床に降りる。ベチャツと泥が跳ねて白い衣装が酷い有様になってしまったが仕方がない。こつちの世界にも漂白剤と柔軟剤という概念がある事を信じよう。

近くに行けば、もはや湯ではなく泥をパチャパチャとするお腐れ様。もしかして、湯を新しくしてくれという事だろうか。

「新しいお湯？　そう言えば蛇口がないけど、これって何処からお湯を引つ張つて来てるんだ?」

ぐるーつと周りを見渡してもそれらしきものはない。他の人に聞くにも、私が目を向けるとささつと目を逸らすして頼りにはならなそうだ。

どうしたものかと考えて、この際この風呂釜の蛇口は探さなくても良いんじゃないかと思いついた。要はお湯があれば良い話なのである。それなら他にも沢山あるではないか……ここは湯屋なんだから。

私はお客様に少々お待ち下さいと告げ、一旦お腐れ様のいる風呂釜から出て隣の風呂釜を覗いた。流石に臭かったのか、隣の浴槽には誰も入っていないのでその中に手を突っ込んで念を送り込む。すると風呂釜のお湯が波打ち始めて次第にふわふわと浮かび上がった。私はそれをそーつと操りながら元のお腐れ様の風呂釜へ行くと、お腐れ様の上からかけ湯の要領で流し始めた。頭からお湯を掛けるのは失礼かとも思っただけ

ど、お腐れ様が占領してしまってお湯を入れられるスペースがないし、気持ちが良いさうだから大丈夫だろう。ついでに念を込めたまま、お腐れ様の汚れが少しでも取れればとお湯で泥を削ぎ落としてみると、何か不純物があるのが分かった。

「?…これは……?」

自転車の窓のサッシ、鉄パイプにタイヤに木のクズ……まるで不法投棄されたゴミの様なものがお腐れ様の中に詰まっているのが分かった。

まさかゴミにも興奮を覚えて集めていたりするのだろうか……嫌な事を考えてしまったが、流石に世界の霸王である腐女子でもそこまでの事はしないだろう……多分。

「湯婆婆様!…このお客様、何やら中にゴミの様な物が詰まっていますが、どうなさいますか?」

取り敢えず年長者に指示を仰ぐ。私にはお腐れ様の思考はトレース出来ない。考えても無駄な事は他人任せに限る。

「ゴミ?…ゴミだつてえ?…下に人を集めな!!…つほら急ぎな!!」

人を集める?…湯婆婆様は一体どうするつもり何だろうか……あまりお腐れ様の近くに男性を近づけさせない方が良い気がするのだが……

上の階でずつと私達を眺めていた湯婆婆様がふわりと降りて来る。ヒュルリと魔法で出したであろうロープは何に使うのか……まさか緊縛?! お客様のプレイに従業員

が合わせるのかそういう……うわあ、私に出来るだろうか……

「千！ そのお方はお腐れ様ではないぞ!! このロープをお使い！」

えっ、お腐れ様じゃない?? じゃあ一旦このロープで何をどうするんだ?? いや、ロープに使い方なんて1つしかない。湯婆婆様の意図はよく分からないが、取り敢えずお客様を縛れば良いのだろう。

私は取り敢えず、湯婆婆様から預かったロープを床の泥水に付けると、念を込めた。すると、ロープがひとりでにスルリと動いてお客様の方へ飛んで行く。足場もぬかるんで悪いし、恐らく手では結ぶのに難航するので魔法を使ったのだ。

泥の体は当たり前だがロープをすり抜けてしまうので、お客様の中にある自転車のフレームや窓のサッシ等にくるくると巻き付けて行く。物理的だけではなく精神的にも私は汚れてしまった。ハク……私、仕事を舐めてたよ。まさか10歳の子供に緊縛プレイの手伝いをさせるなんて……

「湯婆婆様！ しつかり結びましたよ!!」

「よし来た！ 皆の者、ロープを持ってえええ!! 女も力を合わせるんだ！」

湯婆婆様の掛け声で、従業員の男性女性がロープをしつかりと抱えて持つ。慌てて私も同じ様に手伝おうとしたがロープを持つ場所がなく、仕方が無いので浴槽に上って引つ張る事にした。少し危ないが、浴槽に足を掛けて踏ん張れば、その分引つ張る力も

出るだろう。流石に新入りの私がロープを持たずに突っ立っているのは気が引けた。

「湯屋一同ー！ 心を合わせてー！ーえいやー！ー えいやー！ー ーそれー！」

「それー！ それー！」

ロープを引つ張つてゴポリと出てきたのは自転車。ボロボロで本当にゴミという感じだ。

「やはり、さあ気張るんだよ！！ えいやー！ー それー！」

「それー！ それー！ それー！」

瞬間、また何かゴミが出て来たど私が認識した後勢い良くゴミと湯船のお湯が流出して来た。風呂釜のへりに上っていた私も勿論、その被害は受けてゴミの直撃は避けられたものの、お湯を顔から思いつきり被ってしまった。

暖かな水が体を突き抜けて行く。あれ？……この感じを前に何処かで感じた事があ  
る様な……！！

お湯に押し流された私が顔を拭つて目を開けると、そこにはシワシワの老人が朗らかな顔で笑っていた。思わず目を見張るも、老人は構わずに笑い声を上げて天を上つて行く。恐らく湯婆婆様が開けておいたであろう窓から湯屋の外へとあつという間に去ってしまった。

「千ー、大丈夫かああ！！」



「リンさん！ 私は大丈夫です。」

「……………本当に大丈夫か？ お前、顔色悪いぞ?？」

リンさんが心配そうな顔で覗き込んで来る。実際私の精神状態は今、とんでもない事になって居るのだから仕方ないだろう。まさか、今まで記憶を無くしていたなんて……………突然戻った記憶にまだ頭が混乱しているのが自分でも分かる。

「大丈夫……………です。私、部屋で休んで来ますね……………」

「おっ、おうっ！ お大事になー!!」

湯婆婆様含め従業員一同やお客様方が大盛り上がりを見せる中、私は手の中にある泥団子を握りしめて、ふらふらした体である部屋への道のりを急いだ。何で忘れてたんだろうか、こんな大事な事を……………何で気付かなかったんだろうか……………ハクが危ない!!

## 焦る気持ち

人を避けて目的地に行くのが面倒で、私は一旦部屋の窓から外へ飛び降りた。そのまま配管に手を掛けてスピードを緩めつつも落下して行く。ある程度降りたら配管から手を離して壁を横に蹴りながら階段の踊り場に何とか着地した。

流石に基礎の身体能力では無理だが、盛り上がっていた宴会場から攫ってきた日本酒を足と手にぶっかければ行ける。魔法のキラキラ様々だ。

勢い良く扉を開けてポイラー室をくぐり抜ける。目的の場所に到着して早々、私は叫んだ。

「すみません!! 釜爺にお願いがあつて来ました!!」

「何だ千? 腐れ神は何とかなつたのか?」

釜爺はヤカンから直接水を飲みながら作業をしていて、河の主のせいで宴会場へと流れ込んだお客様方のせいとか、いつもよりも随分と暇そうにしていた。

「あ、お腐れ様はどうやら名のある河の主の様だったみたいで、ゴミを取り除いたらすつきりしたのか、砂金を残して帰って行きました。」

「おおつ、それは良かった！ 流石千尋だ!!」

確かに私は頑張ったし、褒めてくれるのはありがたいが、今はそれどころではない。

「つてそれはどうでも良いんです！ ハクが!!」

「ハクが、どうかしたのか?」

何やら私の唯ならぬ様子に気付いたのか、釜爺の顔が真剣な表情になって真つ黒のサングラスを光らせた。

「ハクが、湯婆婆に命令されて錢婆婆の持つ契約のハンコを盗みに行ってしまったんです!! このままじゃ、ハクが……ハクが……」

思わず言葉が尻すぼみになってしまふ……ハクは原作ならちゃんと生きて戻って来る筈だけど、私というイレギュラーがある以上、その通りになるとは限らない。それにその原作でもハクは錢婆婆の呪いで虫が体内で暴れている状態で式神に追いかけられながらも息も絶え絶えに戻って来るのだ。

「何い、契約のハンコだど?! そんなものが湯婆婆の手に渡ったら大変な事になるわい!! それに錢婆婆は隠居こそしているが、湯婆婆と同等に魔法の腕は確かだぞ!」

湯婆婆がハクに盗めと命令したのは契約のハンコ。このハンコがあれば、私達湯婆婆

と契約をしている者達の契約内容が湯婆婆の好きな様にされてしまう。こんなブラツク企業顔負けの勤務形態が奴隷労働にされてしまう、冗談抜きで本当に。

「そんなの分かつてる!! 私、だからこそハクを何とか助けてあげたい!! 釜爺、どうかして錢婆婆の所まで行く方法がない?!」

釜爺なら持つている筈だ、電車の切符を。知っているのにそれを言えないのがもどかしい。かと言って、これを言つて不審がられたら、それこそ本末転倒だ。

「千尋が行つた所で、どうしようもないだろう。ここで帰りを待つて「いやだ!!」」

「私は、私はもうハクを失いたくない……釜爺がそう言うなら、私は泳いででも行く。」  
子供の駄々でも何でも良いから、私は早くハクに会いたかつた。私の泳ぐ速度は、私が陸で走るよりも早い。かと言って電車の速度には全然敵わないのだが。

電車の速度とハクの速度は大体同じ位だからハクが錢婆婆の元に辿り着く前に私がハクと合流する事は出来ない。それでもハクの怪我が少しでも軽くなる様に早くこの泥団子を食ばさせてやりたかつた。

「……うーん、千尋が行くにはなあ、行けるんだが……帰りがなあ……」

釜爺はひとしきり唸つた後、黒い腕を伸ばして奥のタンスを探し始めた。恐らく電車の切符だろうそれは片道分しかないというより、そもそも電車が一方通行しかないのだが、私にとっては天にも勝る物だつた。

「あつた、これだ！ この切符があれば錢婆婆の所まで行けるぞ！」

そうして釜爺が長い腕で私に差し出して来たのは、簡素な電車の回数券だった。

「いいか千尋、これで6つ目の沼の底という駅まで行くんだ。」

「6つ目の沼の底。」

「くれぐれも間違えるなよ。昔は戻りの電車があつたんだが、近頃は行きっぱなしだ。」

心配してくれてだろうけど、私は早くハクの所に向かいたかった。はやる気持ちを抑えて、釜爺の言葉に頷く。

「大丈夫。帰りは自分で何とかする。」

「気を付けて行け!! そうだ、これも持ってけ!!」

「はい!! 釜爺ありがとう！」

半ば釜爺から奪い取る様にして受け取った切符は、少しだけ皺が寄ってしまったものの、しっかりと泥団子と共に私の手に収まっていた。それと共に押し付けられた淡い緑色の袋の紐を手にかけて走り出した。

「やっぱり愛だなあ。」

うるさい。今、シリアスパートなんだから

## ハクを捕まえて

ボイラー室から外に出て階段を駆け下りる。時刻表がなかったから電車の来る時間は分からなかったが、急いで拙い事はないだろう。それに恐らく、あの電車はそれを必要としてくれる人の元へはすぐに駆けつけると思う。それが良いのか悲しいのかはよく分からないけど。

「あつた、あれか……」

しまった。あそこまでどうやって行こうか……。泳いで行ったら切符が塗れて使えなくなってしまうし、原作では確かリンさんがたらい舟を出してくれたのだったか……。しかしここにリンさんがいない以上、自分の力で何とかするしか方法がない。たらい舟も見つからないし、すぐ目と鼻の先にホームがあるのに行けないなんて……

よし、大した距離はないのだし、片手犬かきで行こう。もう反対の手で切符と泥団子を入れた袋を持って手を高く上げていれば大丈夫。大丈夫……だと信じたい。

水が跳ねない様にゆっくりと体を水に浸ける。途端にキラキラし始める体に何だか応援されている様な気持ちになりながらも袋が濡れない様に片手を上げて、私は泳ぎ始めた。

ここが川でも海でもなくて本当に良かった。もし川の流れや海の波があったら、切符はすぐにびしょ濡れになってしまった事だろう。溺れる事なくホームまで泳ぎきった私は何とか地面に乗り上げると、水で濡れてしまった体の水分を抜き取って捨てた。袋の中の切符を見ると、少しだけ水が染みてしまっただけの水分を抜き取って捨てた。さうだ。ほっと息を吐いて、こちらの水分も抜いて乾かすと、皺が更に深くなってしまうが、この位なら許容範囲だ……多分。

暫くホームで電車を待っていると、予想通りに水を押し退けて電車がこちらにやって来た。取り敢えず席に座って窓の外を眺めるも、ハクの姿は当たり前だがない。早く早くと急かす気持ちが伝わったのか、すぐに発車した電車はガタンゴトンと音を立てながら高速で進んで行った。

暫くして、私の車両に車掌さんが来ると、切符を手渡して料金を払った。原作とは違って私に連れがないせいとか、一枚だけ切られた切符は殆ど丸々私の元へと戻って来たが、まあある分には良いだろう。

キヨロキヨロと周りを見渡して人目が無い事を確認すると私は、電車の窓に足を掛け



て、電車の屋根へと上った。ハクと電車がすれ違う時に、片窓から見ていたのでは見逃してしまふ可能性があるからだ。ビュウビュウと私の体から熱を奪って行く風に身を縮めながらも屋根の中央に辿り着いた私は、身を仰向けにして風の抵抗を減らした。

辺りはとつくに真夜中で月が輝いている。河の主様が天に駆けて行ったせいか、雲一つない空は月の輝きのせいで星が殆ど見えないう程だった。ここら辺には湯屋以外に明かりも殆どないので、さぞかし星空が綺麗に見える事だろうに残念だが、ハクの姿を捉える分にはこちらの方が都合が良かった。

ふと、釜爺に渡された袋の中身を見ると、中には竹筒の水筒と黒イモリの串焼きにキャラメル、包帯に傷薬に増血剤に止血剤が入っていた。それに私が中に突っ込んだ切符の残りや泥団子もある。中身がとんでもなく混沌としている。釜爺が袋に入れてくれた後半は恐らくハクの怪我の治療で、前半は空腹の足しにしろという事なんだろうが、釜爺がキャラメルを持っていった事に驚いた。どこのおばあちゃんだ、それは。

取り敢えず今は食欲なんて微塵も湧いてこないの、竹筒の中の水を一口飲むだけにとどめておいた。うん？……水、か。

揺れる電車に片手で体を支えつつ竹筒をゆっくりと傾ける。ほんの少しだけ出て来た水に念を込めた手を触れさせると、ふよふよ浮いたと思ったと同時に勢い良く後方へと飛ばされて行ってしまった。

「あ……そうか。今、電車に乗ってるんだからそうなるのは当たり前だよね。」

今度は進行方向と逆向きに座って、体で風をガードする様にする。そのまま先程と同じ様にほんの少しの水に念を込めて浮かせると、そのまま自分の目の中へと水を導いた。パチャという音と共に水が目の膜を覆って目をパシパシと瞬かせると、途端に視界が明るくなった。

「これで天然の暗視スコープ。視力増強もしてくれる優れものです……ふふ。」

竹筒を袋に戻して、進行方向に顔を向けてゴロンと横になる。先程まで殆ど見えなかった星もハッキリと見えるので、随分と視覚が鋭敏になった事が分かる。これでハクを見つけるのも余裕になっただろう。

まだ来るとは思えないが、取り敢えず目でハクを探しながらも次の行動を考える。まずはハクと合流してすぐに泥団子を口に振じ込む。その後ハンコを取って呪いを潰して、ハクの怪我を治して……ハンコは原作通りに銭婆婆に返すべきなんだろうか。いや、勿論湯婆婆に渡すべきではないというのは分かっているのだが……そうするとハクや私は大丈夫なんだろうか。確実に湯婆婆は怒り狂うだろう。

「はあー……想像するだけで胃が痛い……。」

湯婆婆だつたら怒りに身を任せて私達を殺す位、やってのけそうだ。いや、契約があるから大丈夫なのか？ こうなつたら坊を人質にでもするか……いや、それしたら本

当に逆鱗に触れかねないな。坊を味方に付けるならともかく、敵に回すのは辞めておこう。……こうして考えると原作の千尋は随分と幸運だったのだと分かる……本当に凄いや。普通、10歳の娘があんなハッピーエンドを迎えられる訳ないって。何て言うか、千尋は周りの大人に恵まれていたんだなあ……それは私も同じだけど。私は千尋ほど、周りを頼ってはいないからなあ。

今思えば、私がわざわざ湯婆婆の弟子になる必要もなかった。働きたいって言つて契約を漕ぎ付ければ何とかなった。原作の千尋の場合、坊の泣き声というフオローが入ったから何とか契約出来たのかもしれないが、きつと私が同じ事しても坊が泣き出して同じ結果になった事だろう。それを弟子にして欲しいだなんて……あの時はそれしか方法がなかったとは言え、よくやったな私。

取り留めもない事を考えながらも目ではしっかりとハクを探し続ける。目に張った水の膜は揮発する事がないので、向かい風で目が乾燥するのも防いでくれた。

何時間も電車に揺られていると、やがて目が小さな白い点を捉える。未だ遠くて薄ぼんやりしているが、あれがハクで間違いないだろう。私は急いで足に竹筒の水を掛けて袋を持つと、最後尾の車両まで走って行った。最後尾に辿り着くと、電車の進行方向とは反対方向に勢いを付けて私は飛んだ。これで電車の速度を殺せるとは思わないが、やらないよりはかはマシだろう。ルールに足がついた時点で足の周りの湖の水を操り衝撃

を緩和させて滑りながらも着地する。立って数歩は足が引き攣ったが、何とか歩く事は出来そうである。空を見上げればまだ遠いものの、やはりハクが飛んでいた。人形の式神に追われているのか、直線ではなく時々曲がりながら進んでいる。

私は急いで竹筒の中身を飲んでから残りを捨てると、その中に袋の中身を全て詰め込んで蓋をした。これで何とか防水出来る筈だ。

その竹筒を袋にまた突っ込んで湖に潜る。ドボンという音共に、私の体はみるみる内にキラキラと輝いて行つた。そして湖の水に念を込める。これだけ体がキラキラを纏っていて、水が接触していたら、結構な事が出来そうだ。

次第に波打ち始めた湖の水は、その勢いが増して行く。ハクがすぐ近くに迫つて来た時、その水は真価を發揮した。勢い良く水の柱が天に上つて行くと、それは尻尾からハクを丸呑みにする。その余波で濡れてしまつて効力を無くした式神が湖にパタパタと落ちて行く。巨大な龍となつているハクが必死に抵抗を試みるも、柱はハクを包み込んで離さず、そのまま私が浮かんでいる所まで連れてきてくれた。ハクは暴れながらも私がある事に気付いたのか、驚いた顔をしていたが、私はハクを水で包んで拘束したまま、竹筒の中の泥団子をハクの口に突っ込んで食べさせた。当たり前だが、ハクは暴れに暴れて抵抗をする。

「大丈夫、大丈夫だよ。すぐに苦しくなくなるからね。」

泥団子を何とか飲み込んだハクは、すぐに口からハンコと呪いを吐き出した。体の中で暴れていた呪いの寄生虫がいなくなったせいか、ほっとした顔で人間の姿へと戻り眠ってしまったハク。

水の拘束を解いて慌ててハクを抱きかかえると私は取り敢えず、水で呪いの寄生虫を拘束した後で竹筒の中に放り込んでおいた。踏み潰そうにもここじゃ、逃げられてしまおうだらうから。

出血している場所に気休めでも包帯を巻き、止血剤と増血剤を湖の水で流し込めばひとまずは安心、とはいえハクが気絶してしまった以上、ここからどうやって帰るか……ハクを担いででも泳いだ方が早い、そんな事したらハクの体温がどんどん下がって来てしまう。私は仕方なく、ハクを背負うとホームを目指して歩き出した。

## おばあちゃん

まだ途中だったとはいえ、電車で半日はかかる錢婆婆の家へと行こうとしていたのだ。湯屋に帰ろうとすれば、歩きで何日かかるとも知れない。かと言って電車は一方通行でしか通つてなく、従つてハクという怪我人をすぐに安静な場所に運ばなければいけなかつた私にはもう、選択肢は残されていなかった。

「夜遅くにすみません、錢婆婆さんのお宅でしょうか。私は萩野千尋と申します。怪我人がいるので、家上げて貰えないでしょうか。」

またやつて来た電車に乗つて沼の底駅で降りた私は、庭先の動く街灯に連れられて錢婆婆さんの所までやつて来た。勿論ハクを背負っている状態なので、出来れば早くドアを開けてくれると助かるのだが……氣絶した人間は重く感じられるつて本当なんだな。正直、自分よりも重い男の人を運ぶ事を舐めていた。もう足腰が大変な事になつている。ハクを降ろしたら、もう持ち上げられる自信がない。

ガチャリと音がして、銭婆婆がドアを開けた。

「これはとんでもないお客さんが来ちまったね。……お入り。」

「ご親切、ありがとうございます。失礼します。」

私の背に背負われているのが、自分の所からハンコを盗んで行ったハクだと分かっているだろうに、銭婆婆は私達の中に入れてくれた。

「そいつはこつちに寝かせておきな。」

暖かそうなソファを示されて、そこにハクを運ぶ。暖かい部屋で横になれたせいもあつてか、倒れてしまった時よりも随分と顔色が良くなつた気がする。近くにあつた毛布を掛けて顔に掛かつていた髪を払ってやれば、つい安堵の溜息が出た。

何処となく銭婆婆の口調がトゲトゲしているのは、まあ仕方ないだろう。誰だつて泥棒に親切にはしたくない筈だ。しかし、このまま敵対関係であつては私が困るのだ。ハクを安静に寝かせておいて、私は銭婆婆と向かい合つた。

「あの、ハクの代わりに契約のハンコを返します。」

こちらが銭婆婆に頼つてしまつている以上、このハンコを返さない訳にはいかなくなつてしまった。もしかしたらこれを使って私自身が湯婆婆との契約を書き換えて自由にするという手もあつたかもしれないのに……。契約についてよく知りもしないので難しいかもしれないが、成功すれば湯婆婆以外は皆ウハウハハッピーエンドだ。勿体

ない事をしてしまった。

「お前さん、これが契約のハンコだと知っていて私に返すのかい？」

錢婆婆が私の目を覗き込みながら聞いてくる。嘘なんかついたら即座に見破られそう、私はゴクリと唾を飲んだ。

「はい……正直に言いますとちよつとだけ勿体ないですが。それでも、これは錢婆婆さんの大切なものでしょう……こちらがお世話になつてしまう以上、恩人にハンコは返せなくても仇なんか返せませんよ。」

「……あつはははははは!! お前は面白いやつだねえ! 普通こんな時に冗談で返すかい?」

「うっ……じ、自分では上手いと思つたんですが……」

そこまで笑われてしまうと恥ずかしい。さっきの私はドヤ顔ではなかつただろうか。……穴があつたら爆薬を投げ込みたい位の心境だ。

「自分で上手いつて思つてちや、本当に上手い事は言えないのさ。ん? お湯が沸いたね。さあこつちにお座り。温かいお茶を入れてあげようじゃないか。」

「あ、ありがとうございます。体が冷えてたので助かります。」

そう言えば錢婆婆はアナログ好きいうか、何でも魔法を使う湯婆婆と比べて人間らしい生活を好んでいた気がする。ヤカンでお湯を沸かすのも、暖炉に火をくべて部屋を温



めるのも、糸をわざわざ紡いで物を作るのも、錢婆婆の良い意味での人間らしさの片鱗なんだろう。

案内された椅子に座ると机にどんどん並べられて行くデザートに驚いてしまった。ホールサイズのチーズケーキにカラフルな彩りのクッキーがこんもりと。一人暮らしでこれらがポンと出てくる訳がない。錢婆婆がアナログ好きな事も踏まえると、これは彼女の手作りなのだろうし、魔法を使つてない事は明らかで、おそらく元から用意していたんだろう。

何処まで読んでいるんだろうかと内心舌を巻いていると、目の前にそつとティーカップが差し出された。

「頂きます。」

「どうぞ、召し上がれ。」

可愛らしいデザインのティーカップを持って傾ける。1口目はあまりの熱さに火傷をしてしまつてよく分からなかったが、火傷しない様に気を付けて飲んだ2口目は、体の芯から温まる様に熱い液体が流れていくのが分かつて、ほつと息を吐いた。

「美味しいです、とても。」

「あたしが手ずから入れてやつたんだから当たり前だよ。確かに魔法は大体の事が出来る。だけど、こうやって人の手でやつた事には敵わないんだよ。」

私が魔法に準ずる事が出来ると知っている口ぶりだ。本当にこの人は、何処まで私や他の事を知っているんだらうか。

「あの……私の事……」

「新しく妹の弟子になった人間の小娘だろう。……お前も難儀なものだねえ。普通両親が人質にされたからって妹の弟子なんてなろうとしないよ。」

「あ、あはははは……。それは弁解のしようもありませんね。」

情報源はあの人形の式神とかだらうか。これはもう、この人が知らない事はないと思っていた方が良いのかもしれない。

「……あの、大切なお話があります。聞いて頂けますか。」

原作知識もあるけど、話してみてもそれが確信に変わった。この人は信頼出来る人だ。大丈夫。

「何だい。……紅茶がなくなるまでなら、聞いてやらない事もないよ。」

「はい、全然構いません。お願いします。」

私は話した。湯屋に来てからの事。何で湯婆婆の弟子になったのか。ハクをどう思ってるのか。そして私の持つ魔法の力、さらには前世の椎名優の記憶についても……

「ふうん、なるほどねえ。どうりでとても10歳の小娘には見えない訳だよ。ちなみに前世では幾つまで生きたんだい？」

「前世ですか？ ……ええと、まだ中学生だったので14歳の時ですかね？ なにぶん、記憶が朧気で。」

確かいつも通りに学校に行こうとして、車に跳ねられた筈だ。あれは凄く痛かったのを覚えている。

「14歳？ かあーっ、近頃のカキはませてるんだねえ。」

「ませっ?! えっ、ええーっつと、私の家はちよつと特殊だったので、皆が皆そうとは限りませんよ。」

今思い返すと本当に特殊というか、酷かった。何故か家に帰って来ない父親（浮気性）にお受験ママの母親。母親は私をアクセサリーか何かと勘違いしているし、父親は何だか私をいやらしい目で見てている気がするしで、正直最悪の一言に尽きた。まあ、その記憶もぼんやりとしかかない上に、父親のお陰と言つて良いのか分からないがジークンドーを習つて護身に備えたせいで、今世の私の動きが一般よりも格段に良かったのだが。人間誰しもやらなきややられるという時は、とんでもない力を発揮する。私は前世でそう

学んだ。

「特殊って、一体どんな家だい。普通子供は自分よりも重い怪我人を背負って長い距離を歩いたり、神聖化するほど川で泳ぎの練習をしたり出来ないんだよ。それをあたかも普通のように語るガキの何処が、ませてないって言うんだい。」

「そ、それは……だから、私がやらなくちゃって思つて……」

そもそもガキガキ連呼するが、今の私は前世と足し合わせると24歳である。とつくに成人した大人を捕まえてガキも何も無いと思うのだが。

「いいかい？ 子供は子供らしくしていれば良いんだよ。前世と足せばとつくに成人してるって言いたいのかい？ 馬鹿だねえ、あたしにはお前はただの子供にしか見えないよ。」

「……。」

子供……私はまだ子供なんだろうか。子供でいても良いのだろうか。

「お前は大人なんかじゃあない。ただのませてるガキだよ。」

私がかしかないとつて、そう思つてた……私には前世の記憶も、原作の知識も、魔法の力も……大きな力が備わってたから。だから私がつて………だけど、子供らしく甘えても良いのだろうか、頼つても、縋つても良いのだろうか。

「お、おばあちゃん……？」

瞳から涙が零れる。……そう言えば、こっちの世界に来てから初めて泣いた気がする。

「ほら……こっちに来な。子供は年寄りに甘えるもんだよ。」

湯婆婆と瓜二つな容姿のその胸の中は、とても暖かくて安心した。私はその後子供のように、わんわんと泣いた。こんなに泣いたのは、前世を含めても初めてで、目が溶けてしまわないかと少しだけ心配した……

「なんだ、やっと起きる事にしたのかい？ そう睨むんじゃないよ、青いねえ。やっとこの娘が全部吐き出して寝た所なんだ。このまま寝かせておやり。」

## 契約

暖かい……気持ち良い……何だろうこれ、柔らかい？ でも気持ち良いな……ふふ

……まだもう少しだけこのままで………!!

「えっ、あれ?? ここ何処??」

がぼりと起き上がる。私はいつの間に布団に、というか本当に何処だここ………ベッドなんて久しぶりに寝た。

「もうなんだい、朝っぱらからうるさいねえ……」

真後ろから声が聞こえて来て思わず振り返ると、そこには何故か湯婆婆が同じベッドで寝ていた……あれ、本当に私どうした？ 昨日何があつたんだっけ?? どうして湯婆婆とベットで一夜を過ごしてあるんだ？ あれ？ あれれー??

寝起きと混乱で回らない頭は、ぐるぐると疑問を飛ばす事しか出来ず、その回らない頭で私は取り敢えずの答えを出した。

「お、おはようございます。煩くしてすみませんでした。」

「もう何でも良いから。もう少し、寝かせて、おくれ……」

再び寝入ってしまった湯婆婆に、私が跳ね起きたせいであつた掛け布団をそつと掛け直すと、私はそろそろと部屋を出た。大丈夫、腰が痛くないつて事は一線は越えてない……筈。

寝室の扉を開けると、何処か見覚えのある部屋に出て首を傾げる。あれ、この部屋何処かで……いや、昨日……あつ、そうか、銭婆婆の家か!! と言う事は、さつきのは湯婆婆ではなくて銭婆婆だつたのか……ああ良かった、安心した。

「千尋! 起きたのかい?!

「ハク?! あれ、怪我は?? ハクこそ大丈夫なの?」

ハツとしたハクが、人間の姿で駆けて来た。私の手を取りぶんぶん振り回して随分と興奮しているみたいだが、それだけ怪我の調子が良いという事なので安心した。

「私はすっかり良くなつたよ。全部千尋のお陰だ。」

「そんな……私だけのお陰じゃないよ。私も沢山の人に支えて貰つたんだ。」

そう、ハクの治療をした包帯や薬品は釜爺が私に預けてくれたものだし、この家でゆっくり休む事が出来たのも銭婆婆の親切があつてこそだ。私だけではとてもハクを救う事が出来なかつた。

「千尋は……あの……」

突然俯いてしまったハクに首を傾げる。どうしたのだろうか……まだ、傷が痛むとか  
だったら大変だ。

「ハク、どうしたの?」

「……千尋は……優、なのかい?」

ハクの言った言葉に心臓がドキンとなった。それは別に隠していた訳じゃないが、ハクの中での優と千尋は別者なのだ。私が優とバレる事がハクの幻想を砕いてしまう様  
で、私は焦った。

「っそれは……!」

「すまない。昨日の話を少しだけ聞いてしまったんだ。……もし千尋が優なら私は……  
私は、そなたに酷い事をしてしまった。」

知っている。私からハクの記憶を消して目の前から去った事だろう。つい最近まで  
忘れさせられていたが、全て思い出した。原作において、ハクの影響が多大にあったせ  
いか、原作知識の方も忘れていたのは痛かったが、それも過ぎてしまった事で今更どう  
しようも出来ない。

「……。」

「優を眷属にしてしまった事を無しにしようとして、私の記憶を消す事までしたのに  
……その結果、魔法が失われる事もないし、私との縁でこちらへ千尋を呼んでしまうし



で最悪だ。」

「えっ、眷属?! 待って、一体何の話?!」

あれ、話が違う。眷属って一体何の事だ。ちよつとそこ、キョトンとしないで!

「気付いてなかったのか? ほら、意識すれば分かるだろう。私と千尋に繋がりがあ  
るのが。」

「……。」

ま、まさかそんなものがある訳……ある、な。あるなこれ。完全にそれらしき物  
が感じられるぞ。

「ふふっ、普通の人間が魔法を使える訳ないだろう。千尋は私の眷属となった事で水系  
統の魔法を使える様になったのだ。」

「えっ、ええー。本当に? うわあ、どうしよう。」

眷属って神の従者とかそう言う存在だった気がする。それになったって、私はいつの  
間にか人間を辞めていたのか……まあ、そんな予感はしていたけどね。

「……千尋は、やっぱり私の眷属なんかには、なりたくないよね。」

私が無礼か遠い目をしていると、ハクが寂しそうにそう呟いた。

「うえっ! いやいや!! そう言う訳じゃないんだよ! ただね、こう、人間として大丈  
夫なんだろうかとか、健康上の問題がとかね……」

慌てて放つた理由は、何だかよく分からない物だった。何だ健康上の問題って……。死にたい。

「いや、それなら心配いらないと思うよ。逆に普通の人間よりも、随分と長生き出来るし体も頑丈だし若さが持続するしで良い事ずくしじゃないかな。」

「な、なるほどー。確かに良い事ずくしだー。」

やっぱり完全に人間を辞めてるじゃないか私。思わず返事が棒読みになってしまったのは仕方ない。

「……………大丈夫、分かってるよ、千尋が人間として年を取りたいって思っている事くらい。」

ハクがそう言って笑ってくれたから、私も少しだけほっとした。もしかしたら人間に戻る方法を一緒に探してくれるのかもしれない。

「ハク……………」

「過去の私は私との記憶を千尋から消せば、自然と縁も消えて眷属じゃなくなると思った……きっと私が千尋の事を覚えていたせいで千尋を引き寄せてしまったんだね。」

「えっ、ハク？」

ハクのさつきまでの笑顔が曇って、何だか嫌な予感がして来た。

「安心して。今度はちゃんと私の記憶も消すから。そしたら千尋はもう、私の眷属では

な「ハク!!」

「ハク……私、私は……」

私は、どうしたいんだ？ もしハクの言う通りなら、人間に戻るにはハクと私の記憶をお互いに消さなければならぬ。だが、それを拒めば私は人間には戻れない。元の世界に戻っても、きつと両親や友達を私を残して去って行ってしまうのだろう。そんなもの考えるだけで恐ろしい。

私は選ばなければならぬ。ハクのいるこちらの世界か、両親や友達のいる元の世界か。

「大丈夫だよ。2人とも記憶を無くしてしまうんだ。今は辛いかもしれないけど、きつとそれも分からなくなってしまうよ。」

そう優しく語りかけて来るハクの声が麻薬の様だと感じた。だってこの言葉は毒だ。じわじわと私を苦しめる猛毒だ。

それにハクは、私の事を覚えていてくれたのだ。私との思い出だって、自分が犯してしまった罪だって……全部忘れてしまえば楽になれた筈なのに、覚えていてくれたのだ。私達の記憶を消すのが辛いのはきつとハクも私と同じだ。同じ筈なのに、私にこうやって提示してくれる。優しい神様だ。

「……私、決めたよハク。」

「私は千尋が何を選んだとしても、その道を応援するよ。」

「ありがとう……ハク、私ね、寂しかったの。ハクに記憶を奪われてから、何か足りないくて……でもその何かが分からなくて………寂しかった。」

今なら分かる。いつからか私の中にポツカリと空いてしまった穴は、ハクとの思い出だったのだろう。直接会って話したのはあの1回きりだったが、ハクのいたお社やあの川には随分と通った。それが突然なくなってしまったから、私は寂しかったのだろう。

「千尋……」

「っ酷いよハクっ!! 一方的に記憶を消すなんて! 少しは私の話を聞いて欲しかった!!」

本当にあの時は悲しかった。突然現れたと思ったら一方的に喋り倒してごめんね、ありがとう、さようならの三拍子と来たものだ。正直今となっては、はっ倒してやりたい位の気持ちでいる。

「ご、ごめん……。」

「謝ったって許さないよ!! もうこれはハクに償って貰うしかないんだから!」

「償う? 私に出来る事なら何でもしよう。」

ハクの言葉にニヤリとする。神様は約束は絶対だからね。いや約束じゃ足りないか

……

「じゃあ約束、いや契約だよ。私とずっと離れないで……ずうつと一緒について……お願い。」

「っそれはっ?! でもっ……それじゃあ……?!」

それが何を意味するのか気付いたらしく、ハクは面白いくらいに狼狽えていた。私がハクとの思い出を忘れて人間に戻ると思ったんだろうか……それはなんか心外だな。

「もう私はハクと離れるのは嫌だ。ハクとの記憶を消しても、私が本当にハクを忘れられる事はないよ。」

「……千尋は、本当にそれで良いのかい? もう、人間には戻れないんだよ。千尋のお父さんとお母さんにも会えなくなってしまうんだよ。」

何故ハクは、泣きそうな顔をしているんだろうか。泣くとしたら、私の方だろうに。正直私の選択は、自惚れじゃなければハクとしては嬉しい筈なのだが……やっぱり優しい神様だな、ハクは。

「うん、それが良い。それじゃなきや嫌だ。」

「はは……千尋の嫌だには逆らえないなあ。」

「っじゃあ!!」

「分かったよ。……でも良いのかい? それじゃあ償いというよりはむしろ褒美の様だよ。」

「へっ……あつ、その……」

突然ハクがぶっ込んで来たデレに、私の顔は赤くなった。ハクが私と契約を結んでくれたという事と、突然のデレ発言で、あまりもの嬉しさに私の頭は混乱していた。

言い訳をさせて貰えるのなら、この時の私は何か言わなきやと必死だった。どうにか働かない頭を回して、唯一出て来た言葉がこれだったのだ……

「琥珀川！ ニギハヤミコハクヌシ!!」

瞬間、ハクが覚醒した。

## お別れ

「あたしが寝てる間にそんな事がねえ……。」

私がハクの真名を告げてハクが自分自身を取り戻せた後、テンションマックスなハクの声で目が覚めたのか、錢婆婆さんが寝室から起きて来た。

「はい。自分でもびつくりです。あ、昨日はありがとうございました。お陰様ですつきりました。」

「あんなもの、わざわざ礼を言われる程のもんじゃないよ。それに子供は子供らしくしてろって言っただろ？ これからは敬語は禁止だよ。」

何て漢らしい……。昨日から錢婆婆さん、いやおばあちゃんが格好良すぎて困る。今度兄貴って呼んだら怒るだろうか。

「えっ……うん。分かった、あに、おばあちゃん。………？………ハクどうしたの？ 顔が怖いよ?！」

何故かハクがおばあちゃんを睨んでいる。そう言えば、ハクはおばあちゃんからハンコを盗んだのだし、未だ敵対関係と言つても過言ではなかった。かと言つて私がおばあちゃんに頼んでハクを許して貰うのも違う気がして、その問題は放置しておいたのだつた。

「いや、何でもないよ。それよりも千尋、こつちへおいで。」

「う、うん。」

好きな子と嫌いな子が一緒にいるのが嫌だとか、そういう感じだろうか。ハクも子供っぽい所があるのだなと思つた。

「ふっ……青いねえ。」

青い？ 若いという意味だろうか？ ハクが子供っぽいから??

「……そうだ千尋、あんまり長居するのは悪いし、そろそろ帰ろう。湯婆婆は怒るだろうけど、もう私の呪いも無いのだし心配する事はないよ。」

「あつ、それもそうだね。早く戻らないと。私、釜爺以外に誰にも言わないで出て来ちゃつたから、大変だよ。」

釜爺が他人達に伝えてくれていれば良いだが……まあ、そうでなくても無断で仕事を投げ出して出て行つたのだから、間違いなく大目玉を食らうだろうな。

「別にこつちは長居されても構わないんだけどねえ。じゃあ千尋、気を付けて帰るんだ



よ。……くれぐれも無理はしないようにね。これを機に人に頼る事を覚えなさい。お前はまだ子供なんだからね。」

「うん、分かったよおばあちゃん。ありがとう。また来るね！」

おばあちゃんの優しい言葉に胸が暖かくなる。次に来た時は、こんな事をしたのだと良い報告が出来れば良いなと思った。

「ハク、この娘をしっかりと守るんだよ。それが私へのお前の償いだ。それと、自分も大切にすること。この娘がどれだけお前を大切に思っているのか、それをちゃんと考えて行動する事だね。」

「はい、ありがとうございます。」

ハクは最初こそ微妙な顔をしていたが、最後の返事はしっかりとした声で返していた。

良かった……どうやらこの2人の関係も、なんとか落ち着いた様だ。

玄関を出て広い庭に行くと、ハクがたちまち龍の姿になって私を背中に乗せた。ハクは手を振れないので、ハクの代わりにもと私はおばあちゃんと案内をしてくれた街頭にぶんぶん手を振って、また会う日までのお別れをする。

おばあちゃんは手を振り返してはくれなかつたけど、その目はとても優しくかつた。

## 少年よ大志を抱け

「千尋、ありがとう……私を選んでくれて。嬉しかった。」

湯屋への帰り道で、自然と無言になっていた時に、ふとハクがそんな言葉を零した。

「ハク……。私こそ……縁を結んでくれてありがとう。眷属にしてくれてありがとう。」  
「ありがとう……。か。まさか、眷属にしてしまった事を感謝される日が来るとは思わなかったよ。」

ははつと笑いながら言うハクに、これは私が適当な事を言ってると思ってるなど察した。全く、心から言ってるのに冗談だと思われたらたまらない。

「ハクは自己完結し過ぎなんだよ。きつとあの時の私も、記憶を消されなかったら同じ事を言っていた筈だよ。」

全く本当にその通りだ。ハクは自己完結型で一方通行。だから自分が相手を思ってしまった行動の筈なのに、それが空回ってしまうのである。

「本当に?」

「嘘付いてどうするの? 正直に言えば人間に戻りたい気持ちもある……けどね、けど……ハクと繋がる事が出来て、ハクと一緒に時を重ねる事が出来るって知って、嬉しかったんだ。」

私がハクの眷属だと知った時の事を思い出して、自然と笑みが零れる。始めは意味の分からない力で多少の恐怖も抱いていたのだが、それがハクの眷属になった事による副作用だと知ってほっとしたし嬉しかったのだ。

「そう、そっか……私は随分と勿体ない事をしてしまったのだね。」

ハクの顔が上を向いて懐かしむ様になったのに合わせて、私も顔を上げる。

「本当だよ。ハクがあの時強硬手段に出なければ……」

「今頃、どうなっていたんだらうね……私は千尋と一緒にいられたかな……」

「さあ、分からないけど……」

「けど?」

「きつと、私はハクが何処に行っても会いに行つたよ。」

恥ずかしいけど、だけどこれは本心だし、そうであつたら良いなと思つている私の願望だ。

「そっか……私と同じだね。」

「同……」

どういう意味だろうと私が首を傾げると、何故か鱗をうっすらと桃色に染めたハクが慌てて話し始めた。

「いやっその………実は湯婆婆の弟子になりたかったのは、どうしてももう1度、千尋に会いたかったからなんだ。……記憶を勝手に消しておいて何様かと思うかもしれないけど、それでも一目見たかった。そのために魔法を身に付けようとして身を滅ぼしては世話がないけどね。」

最後の一言を誤魔化す様にハクは笑って話したが、こんなものが笑える筈がない。おぼあちゃんと言っていた、自分が上手いと思っっているうちは、本当に上手い話は出来ないというのとは本当なのかもしれないと、ふと思った。

「それは冗談にして良い事ではないよ………はあ。」

思わず漏れた溜息に、ハクの体が跳ねたのが感触で伝わった。

「ごめんね千尋、不謹慎だった。」

「全くだよ。私がハクをどれだけ心配したと思っっているの？」

すぐボロボロになるし、危険な事も黙って助けを求めないし、原作では最後に湯婆婆に引き裂かれて死亡したのでは？　なんて囁かれてるしで、私は本当に怖かった。

「そうだね………ありがとう、千尋。自分を心配してくれる人がいるって心地良い事なん

だね。」

私以外にもハクを心配してくれていた人達はいたが、今まで全く目を向けて来なかったんだろうと思った。きつと釜爺なんかはそれとなく世話を焼いていたのだろう。これから視野が広くなつて、ハクがそれに気付いたら、きつともつと幸せになれるだろう。

「……青いなあ。」

「? 千尋、何か言った?」

「いや。 頑張れ男の子、つて事だよ。」

「? うん、頑張るね。」

天高く上った太陽は、私達を応援するように、熱く輝いていた。

## 最後は幸せに

「あー……すっかり存在を忘れてたよ。」

「えっ、これはどうなってる?! あれは一体??」

私の横でドン引きした顔で目の前の存在を見るハクに私も同じ気持ちだった。本当にすっかりと忘れていた。いや、記憶から消していたというのが正しいのかもしれない。

「ちよつと千! お前がこいつを引き入れたんだから何とかおし!! さつきからつつ立つてないで、さつさとやりな!!」

湯婆婆がそう捲し立てて来るのが辛い。やっぱり逃げるのは駄目だね? 確かにあいつを湯屋に入れたのは私だけど! だけどき!!

目の前に蠢くのは醜い黒い塊。長い手足にお腹にある大きな口とお面を被った小さな頭がチャームポイントのカオナシ・改だった。

ああ、あの時の私に原作知識があれば招き入れるなんて事をしなかったのに……今更悔やんでも仕方がないが、カオナシにお礼をしなきゃなとか考えてた過去の私の馬鹿！今の私は貴女のせいでカオナシにお礼参りをされていきますよ!!

離れていた所からカオナシが料理を飲み込んで行く姿を見ていたが、これ以上は時間を延ばせそうにない。湯婆婆の必死そうな顔に仕方がないかと腰を上げて気付いた。これはチャンスなのではないだろうか。

「湯婆婆様、確かに私がここに招いた記憶はあります。けど、だからと言って私が対処しなければいけない理由は無い筈ですよ。基本的にカオナシは人に害を与えません。それがこうも変質してしまったのは、それだけの理由がある筈です。」

「何が言いたいんだい?! まどろっこしい言い方は抜きにして、さっさとおし!!」  
湯婆婆が髪を振り乱して答える。先程まで戦闘をしていたのだろう、服や頭にはドロが跳ねていた。

「私がこのカオナシを何とか対処出来た暁には、私の両親の呪いを解いて元の世界へと戻して頂きたいのです。私をここへ縛り付けておくつもりなら、その楔はハクで充分ですよ。」

自分の力で呪いを解けるのなら解きたいが、湯婆婆がわざわざその方法を教えてくれる筈もないのだし、簡単ではないだろう。それならば、一刻も早く両親を元の世界へと

戻すのにこれ程の手はないと思った。

「彼女は完全に私の眷属となった。従って彼女が人間の世界へと戻る事はない。」

「眷属？ ……そうか、なるほどねえ。」

ハクの言葉を聞いて湯婆婆がこちらを見てニヤリとした笑みを浮かべる。

「良いだろう！ お前がこいつを倒した場合、お前の両親を解放してやる!!」

湯婆婆が尊大な口ぶりでそう言い放つたのを聞いて、私の口角も上がる。

「言質はとりましたよ。 ……くれぐれもその言葉を違える事のないように。神の御前ですからね。」

ハク含め、大勢の従業員の他にも、騒ぎを見物しているお客様方がいる。これだけの大勢の前でした契約なのだから違反などしたらただでは済まされないだろう。

辺りを見回してそう言い放つた私に、湯婆婆は憎々しげな顔をしたが、それだけだった。

よし、大丈夫だ。原作の千尋でも倒せたのだからチヨロイチヨロイ。確か、河の主様から貰った泥団子を口に突っ込んで嘔吐させるのだったか……あれ？ 泥団子??

……………ハクに全部食べさせなかったか私?!

一気に冷や汗がどっと吹き出る。うわあ、何て事をしてしまったんだ私は!! カオナシ相手に泥団子がなくて、どうしようって言うんだ?!



「千尋、ああは言ったけど、どうするつもりなんだい？ ……千尋？」

「ハク！ ええつと、待って……今考えるから……」「千尋!!」へっ?」

気が付けば、私はハクに突き飛ばされて床に転がっていた。私がさっきまでいた場所にはカオナシの姿が。ハクの姿は見えない……。

「ハク?! 嘘でしょ?! 返事をして!!」

「あつ……あ……あの子を超越せ! 人間の娘を超越せ!!」

「お前じゃない!! ハクは……ハク……」

私を庇って瓦礫の下敷きにもなっているのだろうか。拙い。このままじゃあハクだけではなく私もあつという間にやられてしまう。

「あつ……あの子を超越せ! 千尋を、超越せ! 千尋、千尋……あ……千尋が欲しい……」

千尋……嫌わないで。」

カオナシの声が進中から切り替わった。この声は嫌に聞き覚えがある。頭に生えていた髪がいつの間にか伸びてストレートになっていてのを見て、私は1つの嫌な結論に辿り着いた。

「っ!! もしかして、ハク?」

「い、嫌だ千尋……千尋、千尋……嫌わないで……愛して……離れないで……千尋、千尋、千尋……」

ふらふらとした足取りでこちらにやって来るカオナシに思わず後ずさりする。ハクが取り込まれて何だか先程と様子が違う様に感じた。

「ハク……食べられ、ちゃった……の……？」

「千尋、千尋……あ……千尋……うおえっ……うおっ……千尋……」

突然カオナシがお腹にある口から嘔吐した。中から出て来たのは青蛙と兄役の男性の2人。どうやら主人格が変わったせいで、用済みとなった2人が放り出されたらしい。

取り敢えずカオナシのすぐ目の前にいたのでは2人が危ないので、引きずって離れた場所へと移さないといけない。あまりカオナシを刺激しない様にそーっと近寄ると、2人を掴んでそのままゆっくりと距離を取って行った。あともう少しで従業員の誰かに渡せると思った時、何か足に違和感を感じた。何故か足がこれ以上進まないのである。歩こうとしてもまるで床の摩擦がない様に進まない。

「千ー！ 何やってんだー!! そんな所で止まってたら捕まっちゃうぞー!!」

「リンさん、足が進まないの!! 何でか分からないけどこれ以上離れられないみたい!」

離れられない? ……まさか、ハクとの契約が関係していたりするの?? もしそうなら拙い。カオナシが私を捕まえようと思えば、私は逃げられずにあつという間に捕まってしまう。

「っはあああ!! 何だつてそんな事になつてゐるんだよ!! ちつ、いいかあ!! そいつを無闇に刺激するんじゃないぞ!!」

他の従業員達と比べて、リンさんの肝の座り様つたらない。大声なんか出したら、自分の方にカオナシが来てもおかしくはないのに。

「うん? 何処だ……」

「うう……ん、あれどうして私はこんな所で……」

と、ここでやつと2人の目が覚めた。これで誰かに引つ張つて貰わずとも、自力で安全な所へと避難する事が出来る。

「あつ、良かった起きた!! 取り敢えず危ないから、あつちに離れててくれると助かるんだけど。」

「千尋様?! あれ、俺……何がどうして……あつ!!」

「千様?! 何故ここに……つてええつ?! お客様?!」

起きた現状への疑問に首を傾げて、目の前に存在するカオナシという化け物に2人は驚愕に目を細めた。まあ先程まで自分達が吞まれていたのだから、それも仕方ないだろう。

「2人とも似た様なリアクション取らなくて良いから、起きたのなら早く行つて……正直言つて邪魔だし、足でまといだよ。」

「ひいっ！　すぐ行きます!!」

兄役の男性は裾を持って、時たま転びそうになりながらも何とか走って行った。

「……千尋様!!　俺には何も出来ませんが応援してます!!　それと助けて下さってあげがとうございました!!」

青蛙が残って私にそんな言葉を掛けて来た。やっぱりこのカエルは何だかんだ良いやつだ。

「……どういたしました……ほら、すぐ行った。」

「はい。」

少しだけカオナシから目を離してしまった。空気がザワリと揺れる。瞬間、耳をつんざく怒声。

「千尋、千尋……千尋の名前を呼んで良いのは私だけの筈なのに……お前が呼ぶな、呼ぶなああ!!」

「つひよええっ?!」

長い腕をムチの様にしねらせて青蛙に向かって攻撃をするカオナシに私はまた叫ぶ事しか出来なかった。

「あ、青蛙!!　大丈夫?!」

「……な、何とか。大丈夫、です。」

青蛙がカエルで本当に良かった。声のする方を見れば、上の階の手すりに張り付く青蛙の姿があった。

それにしてもどうしよう……このままじゃあカオナシの被害は拡大する一方だし、中にあるハクもきつと危険だ。このカオナシの姿はいくらなんでも異常過ぎる。

「つあーっ!! つくそっ! 何で私は泥団子を残しておかなかったんだ!!」

うっかりにも程がある。一体どこの魔術師の凜ちゃんだ私は。

何か、何か泥団子の代わりになるものは………そんなものが都合良くそこらに転がっている訳ないか……いや……

「……あるな。持つてるよ私が。」

腕にプラインと引つ掛かった薄緑の袋を見る。急いで中から竹筒を取り出せばその中身は……

「ビンゴ。……しかもこいつ私のイモリの黒焼きとキャラメルを食べたな。太ってる。」

ハクの体に寄生していた湯婆婆の呪いの虫が、竹筒の底で切符を布団代わりにして、でっぷりした姿で寝ていた。

「こら、起きろー! 寝るな!! 自分の本領を發揮しろ!!」

竹筒を激しく横に振ると、小さな丸い目が見開き何が起こったのだと慌て始めた。全く私があれば生命の危機にあつて、カオナシとやりあつていたというのにこいつは

……

「よし起きたな！ 行くよ!! 投げ込むよ!! 着地したらちゃんとハク以外を食い荒らすんだよ!!」

竹筒に向かつてそう怒鳴れば中の虫がペコペコ頭を下げて了承したので、私は竹筒を思いつき振りかぶると蓋を開けたそのままカオナシの口へと投げ込んだ。

「あ……千尋、千尋……あつ……あつ……千尋、一緒にいて……ううつ!? ……があつ!! っくう……うああああ!! 千尋?! 千尋おとおお!!」

ハクの声でそんなに泣き叫ぶ様にされると辛い。

「大丈夫だよ。全部出したらきつと良くなる。」

あまりもの暴れ具合に私はそつとカオナシに近寄った。カオナシは私を捕まえるなり何なりしてくるかと思っただけ、暴れて料理や装飾を壊しても、私に危害を与える事は一切なかった。

大分苦しそうだ。……それもそうか、お腹の中で随分と精力の回復した虫が暴れていたら、誰だつてそうなる。カオナシは口の端からは泥が零れて、歯を思いつきり食いついてる。このままじゃ嘔吐が出来ないと私は気付いて、ならばとがら空きのカオナシのボディに1発ぶち込んだ。

「ぐあああ!! うつ……うおおえつ! ……うおつ! ……かはつ……」

思わず開いた口からはハクが出て来て、そのまま口の中の泥と共に地面に倒れ込んだ。そこからはもうあつと言う間で、口に入っていたものがどんどん外に出されて行き、最後に呪いの寄生虫を吐き出してカオナシは通常のコミュ障に戻った。

「ハクっ！ 大丈夫?!」

「……………あれ……………千尋?」

「良かった!! 良かったハクっ!!」

思わずハクに抱きつく。本当に良かった……………ハクがカオナシに食べられてから今まで生きた心地がしなかった。

「ああ、そうか……………千尋が、助けてくれたんだね……………」

「うん、ハクが無事で良かった!!」

「千!! 何やってるんだい!! そいつはまだ倒れちゃいないよ!! 早く仕留めな!!」

湯婆婆の声に肩が跳ねる。嘘、だってカオナシは元に戻った筈……………

「えっ……………ええつと……………」

カオナシの方を見ても、そこにいるのは初期の姿の何の害もないカオナシだった。

「そいつがまた何か悪さをする前に殺してしまうんだよ! さあ早く!! じゃなきやお前の両親を返す事は出来ないねえ!」

「っ!!」

そんな!? カオナシはそれ自身では決して害を与えないのに。人の欲に付け込んで体に乗っ取りはするけど、それもその人の深い欲にカオナシが引き摺られるからだ。原作ではおばあちゃんの所で仲良くお仕事に精を出す筈だったのに……

殺すんだ、殺せ、殺さないと……両親を助きたいなら、他人の命くらいどうだって良い筈だろう? 私は、私は……

「つ無理だ……ごめんお母さん、お父さん………」

殺す? 無理だ怖い。たとえそれが人間じゃなくても私が殺すなんて……怖い。気持ち悪い。チャンスだったのに……2人に最後に出来る親孝行かもしれないのに……本当にごめんなさい。

「つ湯婆婆様! それならば私がやりましょう!! それならば両親の呪いを解く事を許して頂けますか?!

ハクが私を庇う様に腕に抱えて湯婆婆に進言する。駄目だよ。ハクにそんな事をして欲しくない。それにきつと湯婆婆は……

「はっ、私が契約したのはその人間の小娘とだよ! お前がやった所で契約は完了しないね!」

そう言うだろうと思った。予想通り過ぎて悔しくもない。

ともあれ、これからどうしよう。出来ればカオナシを逃がしてやりたいのだが……そ



んな隙間があるだろうか。

「全く年寄りが若い子が頑張ってるのにちやちや入れるもんじゃあないよ。」

私の後ろから声が聞こえた。湯婆婆と同じ筈なのに……酷く優しくして慈しむ様な、声が聞こえた。

「……おばあ、ちゃん？」

「よく頑張ったね千尋、後はあたしに任せな。出来の悪い妹の躰くらい、姉が何とかするよ。」

振り返るとそこには、いつか私が濡らしてハクから落とした人形の式神が浮かんでいた。もしかして、私を心配して付けておいてくれたのだろうか……だったら嬉しい。

「っ 銭婆婆ああああ!!」

「全く姉を呼び捨てだなんて、失礼な妹だねえ。」

湯婆婆が腰に手を2つ構える。すると大きな光の玉が発生して、それがおばあちゃんに直撃した。

「っおばあ「はいいやだね、せつかちなのは嫌われるよ。」……ちゃん？」

攻撃が直撃した筈のおばあちゃんは何故か無傷で突っ立っている。ついやそうか!

あの姿は投影した偽物だから、本体である人形を逃がせば傷が付く筈もないんだ!!

「じゃあ今度はこっちだね。式神! 湯婆婆を拘束せよ!!」

おばあちゃんが手を叩くと、そこから何枚も重なった以前見たのと同じ人形の式神が出現する。それらの式神は、命令を受けるとふわりと飛んで湯婆婆の周りを囲んだ。

「ふんっ、目障りなだけの何の力もない式神であたしがどうこう出来ると思ってるのかい?」

湯婆婆が先程の光玉を放って式神達を撃ち落として行く。

「だからお前はハイカラじゃないんだよ。それはこつちのセリフだね。」

おばあちゃんの手にはいつの間にか再び大量の式神が出現していた。

「さて、物量で押し切るのは好きじゃないんだが、お前は何処まで耐えきれるか?」  
「くっ?!」

強い!! 湯婆婆の光玉は威力は強いが広範囲のものではなく、恐らく連発も難しい。それに大量の式神で対処するのは、ハクでも振り切れなかったのだからその凄まじさが分かる。一体一体が意識を持って獲物を追いかけて、決して自ら危ない所へは入っていかない判断能力の高さもある。私があそこまで簡単に式神を一掃出来たのは、奇襲を掛けた事と相性が水で悪過ぎたからだろう。そうじゃなければここまで湯婆婆が苦しんでいない。

式神が1枚、2枚と湯婆婆に張り付いて行く。それをベリっと手で剥がせば、その間に更に2枚が張り付く。それらを攻撃の合間に繰り返せば自ずと湯婆婆の体は式神で

埋まっ行って……

「が……あ……くっ……」

湯婆婆は目と鼻以外の指先に至るまで全てが式神によって覆われて拘束されてしまった。

「凄……あの湯婆婆がここまで手が出ないなんて……！」

戦いはまさに圧倒の一言に尽きた。湯婆婆の光玉は全ておばあちゃんに避けられ、じわりじわりと式神で拘束していく。言ってしまったえば簡単だが、それをあの湯婆婆相手にやっつてのける事が凄。

「さあて、それじゃあ妹へ姉からの罰と行こうじゃないか。……リン、例の物をお出し。」

「はいよ、婆さん！」

「えっ……リン、さん？」

突然現れたリンさんに驚いた。リンさんがおばあちゃんに渡したのは書類……だろ  
うか。とんでもない量がある。

「よっ千！ 何とかなつたみたいで良かったな!! なんかこの婆さんに突然頼まれてな  
! 湯婆婆の部屋からそれを取ってこいってさ。もう頑丈な鍵が付いてて参ったぜ!」  
いつの間に……全然気付かなかつた。

その分厚い書類の束を床に置き、おばあちゃんが懐から取り出したのは見覚えのある

ハンコだった。

「お前はちよつと注意したくらいじゃ治らないからね。これで少しは反省おし。」

書類の内の一枚をおばあちゃんが持つ。そしてそれにハンコを押すと書類が淡く光った。

「この者の名を返す。そして契約した者に対等な権利を与え、それらに害を与える事を禁ずる。」

書類の光がいつそう強くなると、書類からペリペリと何かが剥がれて私の方へとやって来た。萩野千尋、私の今世での名前だ。私がそれに軽く触れると、文字は染み込む様にして消えて行つたが、指先には暖かさが残つた。

おばあちゃんはその作業を全部の書類、要するに従業員全員のものを行い、書類を湯婆婆の足元に返して私に向き合つた。

「あたしがやれるのはこれでお終い。妹も、根は良い子んだけど昔つからあたしに突つかかつて来てね。まあ、自分を強く見せたいんだろうけど、空回つてばかりなんだよ。……これからお前達が関わる事で変われると良いんだけどねえ。」

困つた様に笑つたおばあちゃんは、何処か悲しそうな顔をしていた。

「つありがとう！ 任せておばあちゃん！ 今度、良い報告と一緒に遊びに行くね!!」

「そうしてくれると助かるよ。……そうだ、お前はうちにおいで。ここから電車で6つ

目の沼の底、で待ってるよ。」

「あ……。」

良かった、カオナシも無事おばあちゃんに引き取って貰えそうだ。おばあちゃんが提案しなかったら、私から頼み込むつもりでいた。

「じゃあ早く遊びにいらつしやい。紅茶を用意して待ってるよ。」

そう言っておばあちゃんの姿は消え、床には縦に裂かれた人形が1枚残った。

「ねえハク……これって喜んで良いんだよね?」

「ああ、私も千尋も、皆で喜ばないとね。」

じわじわと目に涙が浮かぶ。突然の展開に付いて行けなかったが、何が起きたのか理解すれば後は早かった。

「ついいーやっただああああ!!!」

リンさんの声をかわきりに、あちらこちらで上がる歓声。

「ハクー!!」

「つぐつ! 千尋、ちよつ……みぞおちが……」

私も思わず隣にいたハクに抱きついてしまった。

「ハク、ハク……私、やったよ……ちゃんとやれたよ……」

「ハクのお腹に手を回してぐりぐりと顔を擦り付ける。もう完全に涙腺が崩壊してい

るので、必要な手段だった。

「……うん、そうだね。千尋は頑張ったよ。」

ハクがそつと私の頭を撫でてくれる。頭なんか、両親にも何度も撫でられた事があつたのに、ハクの手はとても気持ち良かった。

「ハク、もうあんな思いはこりこりだよ。心配させないって約束してね。」

「うっ……善処する。」

私が涙ながらにハクにしたお願いは、何処か微妙なハクの返事によって進化する事となった。

「契約ね。」

「えっそれは…「千ー!!」なーにイチャイチャしてるんだよ羨ましい!!」

突然現れたリンさんの声に驚いて、ハクから離れる。

「えっ、イチャイチャ……!?!」

イチャイチャ……他人から見たらそう見えたのだろうか。いや、よく考えれば私から見てもイチャイチャしてたなつきは。うわあ、恥ずかしい。人前で何をやってるんだ私は……

「はっ? お前それでイチャイチャしてるつもりなのかよ。無自覚って怖えな。……それよりもお前らいつの間にか付き合ってたんだよ。全く秘密にしておくなんて隅に置け

ねえなあー！」

私と肩を組んで言ったりリンさんの言葉に動揺が走った。付き合う？ 付き合う?!

「付き合っ……ええっ?!」

「えっ、付き合っなくてそれなのか?! ……あー…ハク、すまん。」

何故かハクに謝るリンさんに何がどういいう訳なのか分からなくなってしまった。ハクを見れば、何故か無表情で立っており更に混乱が増すばかり。

「えっハク?! どういう事?」

「……私はそういうつもりでいたのだが…そうか……違かったのか千尋は……」

「えっ、その……あ、ええ……」

そういうつもりというのはつまり…ええっと……もしかなくとも……。

「あーっつと、……じゃあ俺はこれで! またな千!!」

漂い始めた空気を察してか、元気に去って行くリンさん。正直この場にいられても困るので助かったが、何だか体が落ち着かない。

「しかし見方によつては逆プロポーズされて男としての威厳がなくなっていた事を挽回出来るチャンスかもしれない。よし……千尋、聞いてくれるかい?」

ハクが真剣な顔で私の手を取った。

心臓が痛い位に煩い。口がニヤけてしまいそうだ。

「っはい。」

「私はね……」

流石に恥ずかしいのでこの話はここまでだ。……ただ、その後会場が更に沸いたとだけ、伝えておこう。





## 後書き

いかがだったでしょうか、「優と千尋の神送り」は。

神送りというのは全国の神様が出雲大社へと旅立つのをお送りする事らしいです。千尋が原作とは違って人間ではなく神としての道を選んだので、旅立ちの意味も込めてこのタイトルにしました。

そして出雲の地であった愛媛県の道後には日本最古の温泉と言われる道後温泉（どうごおんせん）があるのだとか。宮崎駿さんが千と千尋の神隠しの舞台にした道後温泉、1度で良いので行ってみたいですね。写真で見ただけでも立派な建物で所々映画を思わせる風景があつたので、私もカメラのデータを温めたいです。

ところでこのお話に登場する主人公の萩野千尋（前世：椎名優）なのですが、前世のせいもあつてか両親に激甘でマザコンのきららがあります。普通はお父さん、お母さんと呼びませんか？ それが逆転している、つまりそういう事です。正直客観的に見ると優しい父親の方が冷たい印象の母親よりも良いとは思いますが、そこは前世の父親の

業と言いますか、若干大人の男性に恐怖感を抱いている千尋です。その点ハクはいつまでも若いままですし、言い方が悪いですが都合が良いと言えるのかもしれないですね。

今作の千尋は大人になるしかなかったチグハグな子供というイメージで書いています。前世で周囲がどうしても優を子供でいさせてくれなかったせいで、大人になるしかなかった。だけど子供でいる過程を経なかった事から、心の底ではまだ子供でいたかったという思いがあり、銭婆婆との邂逅でそれらが露見しました。

後から見直すと銭婆婆が本当に凄い。チート過ぎる。流石お姉様と言った感じでした。

原作の千尋と今作の千尋、意図してはいなかったのですが色々対極な性格になってしまいました。引っ込み思案で甘えたの千尋と人に頼る事が下手な我が道を行く千尋、原作千尋がハクや湯屋の人達に前面的にお世話になっていたのに対して今作千尋はなるべく対等でお互いに守り守られる関係を目指しました。こうでもしないとハク様が救えなかった……原作の最後のハク様がどうなってしまったのかが分かりませんが、今作では幸せになって欲しいです。

Wordで90ページにもなってしまった「優と千尋の神送り」でしたが、テスト期間中のノリと勢いで書き上げました。金曜ロードショーで毎年見ている千と千尋の神隠しでしたが、小説のために設定を読み込むと、中々に話が深く、次に観た時は深く楽

しめそうです。

最後に放置されていた湯婆婆が今後どうなるのか、カオナシは1人でお出かけ出来るのか、千尋とハクの今後の展開は、両親は……もしかしたら続くかもしれませんし、このまま謎で終わるかもしれません。ジブリ作品的には1話で完結させるのが正しいので考えものですね。

それでは、ここまで読んで下さりありがとうございました。千と千尋の神隠しに嵌る方が1人でも出て下さいましたら嬉しいですよ。

そして時は流れる

手紙

お母さん、お父さん、元気ですか。私は人間を辞めてしまいましたが、とつても元気です。

2人は今、幸せですか？ 楽しいですか？ 充実していますか？

私は2人と離れ離れになって寂しいけど、中々充実した毎日を送っています。好きな人と一緒になれたし、優しい仲間やおばあちゃんと楽しくわいわいやっています。

それと、2人に謝らなさいけない事があります。酷い自己満足で、直接言う事も、この手紙を届ける事も、何も出来ないけど……だけど、どうか謝らせて下さい。

貴方達のたつた1人の娘を奪ってごめんなさい。きっと私が、私として生まれて来なかつたら、千尋は貴方達の元に帰っていたから。だから、ごめんなさい。

私がした事は、以前私がハクにされた事と全く同じ。2人から私の記憶と私自身を

奪つて、消して、無かつた事にした。それつてとっても寂しくて、辛くて、苦しい事なのに……自分が1番それを分かっている筈なのに……私の願いのために2人にそれを強要した。本当にごめんなさい。

私は、記憶を無くした2人が、私なんかの事を気にしないで心穏やかに過ごしてくれる事を願つてます。もしかしたら杞憂かもしれないけど、2人は私なんかを愛してくれた人達だから……だからその分幸せになつて欲しいんです。

そうだ、今度は娘じゃなくて男の子を産むのも良いかもしれないですね。きっと2人の息子なら、可愛い子供が産まれる筈です。娘でも良いですが、私の面影だけは探さないで下さいね。

そういえば、湯婆婆という偉い魔法使いの人に習つて私の魔法の力も大分付いて来ました。あ、そう言えば2人には魔法が使える事を秘密にしていたんですね。ごめんなさい。

神格も上がつてそれらしい事が出来る様になつたので、こつちの世界から毎日2人の幸せを祈っています。私という存在を2人に返す訳にはいかないけど、だけど2人にこの思いが少しでも届くといいなあ。

ずっと育ててくれてありがとう、親不孝で本当にごめんなさい。さようなら。

「千尋？ 何をしているの？」

後ろからかかって来た声に、ペンを置いて振り向く。

「ハク………………。手紙をね、書いてたの。」

「手紙？ 誰に宛てて？」

「…………両親。」

「それは…………」

途端に眉を寄せたハクに慌てて誤解だと伝える。

「違うの！ やっぱり人間に戻りたいとかじゃなくてね!! その……………私の罪悪感から書きたくなっちゃったの…………。」

「大丈夫…千尋が約束をしてくれたから、何も不安には思っていないよ。」

ハクの手が優しく私の頭を撫でる。最近よくしてくれる様になったこの行為が私は好きだ。

「…………うん、ありがとう。」

「直接お別れしなくて本当に良かったのかい？ どうせ記憶を消してしまったのだし、

その方が千尋もスツキリしただろうに。」

ハクが心配そうな声で言った。

湯婆婆との契約は、おばあちゃんのお陰でどうにか履行された。その際、皆にもハクと同じ事を言われたが、私はずっと首を横に振り続けたのだ。

「あはは……直接会うのはやつぱり寂しくて泣いちゃいそうだったし、私にはお別れを言う資格なんてないよ。……自分の願いのために両親から娘を奪ったんだからさ。」

ポリポリと頬をかきながらそんな言い訳を口にするが、すぐにハクの顔が咎める様なものになってしまい、自分の不注意な発言に気付いた。

「千尋……そんな言い方をしてはいけないよ。それでは私達の再会も否定してしまう様なものだ。」

「あ……そう、だね。ごめんなさい、ハク。」

あの言い方ではハクが過去の私に会いたかった事まで否定しているみたいではないか。失言だった……うう、自己嫌悪だ。

「そうだ、リンさんが新しい商品が出来たから持って来てくれるらしいんだ。行く。」

私を元気付けるために、明るい声で手を取って、そう誘ってくれるハクにふっと笑みがかぼれた。



ちなみに、リンさんはおばあちゃんのツテで新しく料理店を始めてしまい、もう油屋では働いていない。その割にはこうしてちよくちよく会っているのだが、開店早々で忙しいだろうに平気なのだろうか……

「えっ、また？ リンさんお店大丈夫なのかな……」

「可愛い千尋に会いに来てくれてるんだろう。リンさんも。」

「かわつ……ああうん、そーだね。行こう行こう。」

これだから天然は未恐ろしい。最近では前程顔が赤くならず済んでいるが、それでも突然こういう事を言われると対処に困るのだ。

「ふふっ。」

「……何？ ハク……」

「いや、千尋が今日も可愛いなって。」

笑いながら言った言葉と、その悪戯が成功した子供みたいな表情で大体察してしまった。……あの頃の純情無垢なハクは何処に行ったんだろうか。

「このっ……確信犯か。」

「ふふふっ。」

でもまあ、そんなハクも悪くはない……と思ってしまうのは、私の惚れた弱みというやつなのだろうか。



1年後、ある夫婦の元に待望の第一子が産まれた。この子供が、後にどう物語に関わって行くのか、未だ分からない……

《つづく?》